高等学校における教科指導の充実

地　理　歴　史　科

資料を活用した学習を取り入れた
世界史の指導

栃木県総合教育センター
平成24年３月

ま　え　が　き

21世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われています。そのような時代を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっています。他方、各種の国際的な調査では、我が国の児童生徒について、思考力・判断力・表現力等、知識・技能の活用、学習意欲、学習習慣・生活習慣などに課題があると分析されました。このような状況を踏まえて、平成20年１月の中央教育審議会の答申を受け、平成21年３月に高等学校学習指導要領が告示されました。

この新しい学習指導要領は、高等学校では平成25年度入学生から年次進行で実施されます。総則の一部、総合的な学習の時間及び特別活動においては、平成22年度から先行して実施されています。また、数学、理科及び理数の各教科・科目については、平成24年度入学生から年次進行により先行して実施されます。各学校においては、新しい学習指導要領の理念をどのように実現していくのか、具体的な検討を進めていることと思います。

栃木県総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図る教科指導の在り方について研究するとともに、その成果を普及することで生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。今年度は、昨年度に引き続き、「今回の学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各教科に求められている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る」ことに重点を置き、国語科、地理歴史科、理科、保健体育科、商業科で調査研究に取り組みました。本冊子はその成果をまとめたものであり、教科指導を充実させる一助として、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年３月

栃木県総合教育センター所長
瓦　井　千　尋

目　　　　　次

１　**本調査研究の背景**　…………………………………………………… 1

２　**資料を活用した学習を取り入れた世界史の指導**　………………………… 5

事例１　年表や地図を活用して、14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行の背景について考察する授業　…………………………………… 7

事例２　ドレークの航海に関する資料を活用して、航海の目的を考察する授業　…………………………………………… 20

事例３　19世紀のロンドンに関する絵画資料を活用して、当時の社会の変化を考察する授業　…………………………………………… 34

３　**世界史における授業改善の方策**　…………………………………… 47

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。
（「とちぎ学びの杜」 http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/）

１　本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各教科に求められている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探ることに重点を置き、国語科、地理歴史科、理科、保健体育科、商業科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方、教育内容の主な改善事項及び学習評価の基本的な考え方について整理する。

（１）学習指導要領改訂の基本的な考え方

平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂では、21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため、「生きる力」をはぐくむという教育課程の基準全体の見直しを図った。今回の改善の方向性は、平成20年１月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に示されている。答申では、以下の①～⑦を基本的な考え方として、各学校段階や各教科等にわたる学習指導要領の改善の方向性が示された。

①　改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
②　「生きる力」という理念の共有
③　基礎的・基本的な知識・技能の習得
④　思考力・判断力・表現力等の育成
⑤　確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
⑥　学習意欲の向上や学習習慣の確立
⑦　豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

具体的には、①については、教育基本法が約60年振りに改正され、21世紀を切り拓(ひら)く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められたことや学校教育法において教育基本法改正を受けて、新たに義務教育の目標が規定されるとともに、各学校段階の目的・目標規定が改正されたことを十分に踏まえた学習指導要領改訂であることを求めた。③については、読み・書き・計算などの基礎的・基本的な知識・技能は、例えば、小学校低・中学年では体験的な理解や繰り返し学習を重視するなど、発達の段階に応じて徹底して習得させ、学習の基盤を構築していくことが大切との提言がなされた。この基盤の上に、④の思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など、知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘した。また、⑦の豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる必要があるとの提言がなされた。

また、高等学校の教育課程の枠組みについては、高校生の興味・関心や進路等の多様性を踏まえ、必要最低限の知識・技能と教養を確保するという「共通性」と、学校の裁量や生徒の選択の幅の拡大という「多様性」とのバランスに配慮して改善を図る必要があることが示された。

（２）教育内容の主な改善事項

平成21年告示の高等学校学習指導要領における教育内容の主な改善事項は以下のようである。

●言語活動の充実

・国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実した。

●理数教育の充実

・遺伝など、近年の新しい科学的知見等を踏まえ内容を充実し、統計に関する内容を数学Ｉに導入した。

・日常生活や社会との関連を重視した改善を図った。

・数学Ｉに〔課題学習〕を導入したり、科目「理科課題研究」を新設したりするなど、知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視した。

●伝統や文化に関する教育の充実

・歴史教育（世界史における日本史の扱い、文化の学習を充実)、宗教に関する学習を充実した。

・古典（国語)、武道（保健体育)、伝統音楽（芸術「音楽」)、美術文化（芸術「美術」)、衣食住の歴史や文化（家庭）に関する学習を充実した。

●道徳教育の充実

・学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について、その全体計画を作成することを新たに規定した。

・現代社会や特別活動において人間としての在り方生き方に関する学習を充実した。

●体験活動の充実

・ボランティア活動などの社会奉仕、就業体験を充実するとともに、職業教育において、産業現場等における長期間の実習を取り入れることを明記した。

●外国語教育の充実

・指導する単語数を増加するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場とするという観点から、授業は英語で指導することを基本とするなどの改善を図った。

●職業に関する教科・科目の改善

・職業人としての規範意識や倫理観、技術の進展や環境等への配慮、地域産業を担う人材の育成等、各種産業で求められる知識・技術等を身に付けさせる観点から科目構成や内容を改善した。

（３）学習評価の基本的な考え方

現在、高等学校においては、学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評定とを、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施している。小・中学校において観点別学習状況の評価が定着していることから、高等学校段階においても、学習評価の前提となる指導と評価の計画や、観点に対応した生徒一人一人の学習状況を生徒や保護者に適切に伝えていくなど、学習評価の一層の改善が求められている。

このようなことから、高等学校においても、学校教育法や平成21年告示の高等学校学習指導要領を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力等主体的に学習に取り組む態度に関する観点についても評価を行うなど、観点別学習状況の評価の実施を推進し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。なお、高等学校における教科・科目の評価の観点は、小・中学校との連続性に配慮しつつ、平成21年告示の高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の実態に合わせて設定することが適当である。

また、学習評価は、生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものである。したがって、学校が地域や生徒の実態を踏まえて設定した観点別学習状況の評価規準や評価方法等を明示するとともに、それらに基づき学校において適切な評価を行うことなどにより、高等学校教育の質の保障を図るものである。

平成21年告示の高等学校学習指導要領における評価の観点は、以下の囲みのように整理される。「知識・理解」及び「技能」については、教科の特性に応じ、知識と技能に関する観点が分けて示されていることもある。また、「思考・判断・表現」については、各教科の目標や内容を踏まえ、当該教科において育成すべき能力にふさわしい名称とし、位置付けられている。

●「関心・意欲・態度」

各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。評価に当たっては、各教科が対象としている学習内容に対する児童生徒の取組状況を通じて評価することが基本であり、例えば、授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目することにならないよう留意する必要がある。

●「思考・判断・表現」

各教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。従来の「思考・判断」に「表現」が加えられた。これは、この観点に係る学習評価を、言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品等と一体的に行うことを明確に示したためである。

このため、この観点を評価するに当たっては、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な現象を評価するものではなく、例えば、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動等を通じて評価するものであることに留意する必要がある。

●「技能」

各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。基本的には、従来の「技能・表現」で評価している内容は引き続き「技能」で評価する。

今回、各教科の内容に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価す

る観点として「思考・判断・表現」が設定されたことから、当該観点における「表現」との混同を避けるため、評価の観点の名称が「技能・表現」から「技能」に改められた。

●「知識・理解」
　各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価するもの。従来の「知識・理解」の趣旨を踏まえた評価を引き続き行う。

　また、評価の在り方については、「高等学校学習指導要領解説　総則編」で、次のように述べられている。

〈第３章　５　(12)　指導の評価と改善（第１章第５款の５の（12))〉
　基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し,学習意欲を高めるための指導を行うためには,評価の在り方が大切である。いわゆる評価のための評価に終わることなく，生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって,教師が自らの指導を振り返り,指導の改善に生かしていくことが特に大切である。
　評価に当たっては，生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して，主体的な学習の仕方が身に付くように配慮するとともに，生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切である。その際には，学習の成果だけでなく，学習の過程を一層重視する必要がある。特に，他者との比較ではなく生徒一人一人の持つよい点や可能性などの多様な側面，進歩の様子などを把握し，学年や学期にわたって生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要である。また,生徒が自らの学習過程を振り返り，新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うことが大切である。

　学習評価においては、生徒のよい点や進捗の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、教師が自らの指導の改善を行い、生徒の学習意欲の向上に生かすようにすることが大切である。そのためにも、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の４観点の趣旨を踏まえ、適切に評価を進めていくことが求められる。

※本冊子においては、以降、平成11年３月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年３月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。
※本冊子に掲載した単元等に付してある評価規準は､新学習指導要領における教科・科目を想定して、参考として掲載したものである。

２　資料を活用した学習を取り入れた世界史の指導

新学習指導要領の地理歴史科における改訂の要点は次の３点である。

①科目相互の関連の重視

②課題を探究する学習を柱とする言語活動の充実

③地図や年表など様々な資料を活用した学習の一層の重視

特に「言語活動の充実」及び、知識及び技能の活用を図る学習活動である「資料を活用した学習」は、新学習指導要領に以下のような記述があるとおり、生徒の思考力、判断力、表現力をはぐくむ観点から重視されている。

> 第１章　総則
> 第５款　教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項
> ５　教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項
> (1) 各教科・科目等の指導に当たっては，生徒の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，生徒の言語活動を充実すること。

これを受けて、「世界史Ａ」及び「世界史Ｂ」では以下のような改訂が行われた。

「資料を活用した学習」の重視に関しては、それぞれの科目の目標に「諸資料に基づき」の語句が新たに加えられ、年表、地図その他の資料の活用を通して世界の歴史を理解させることが明記された。特に地図を活用した学習を一層重視する旨が、平成20年１月の中央教育審議会答申の地理歴史科の改善の具体的事項の中に明記されており、歴史の授業においても地図の活用が重視されるようになった。また、「その他の資料」の例として、平成22年の『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』には、「文学作品などの文献資料，絵画や地図，写真等の図像資料，映画や録音などの映像・音声資料，日常の生活用品を含めた遺物，地名，伝承などの諸資料」があげられている。

「言語活動の充実」に関しては、以下の表のように、「世界史Ａ」では大項目(1)と大項目(3)に、「世界史Ｂ」では大項目(1)から(5)に、主題を設定して行う学習が設定された。

〈世界史Ａ〉	〈世界史Ｂ〉
(1) 世界史へのいざない	(1) 世界史への扉
ア　自然環境と歴史	ア　自然環境と人類のかかわり
イ　日本列島の中の世界の歴史	イ　日本の歴史と世界の歴史のつながり
	ウ　日常生活にみる世界の歴史
(3) 地球社会と日本	(2) 諸地域世界の形成
オ　持続可能な社会への展望	エ　時間軸からみる諸地域世界
	(3) 諸地域世界の交流と再編
	エ　空間軸からみる諸地域世界
	(4) 諸地域世界の結合と変容
	オ　資料からよみとく歴史の世界
	(5) 地球世界の到来
	オ　資料を活用して探究する地球世界の課題

「世界史Ａ」では、導入時期の学習として大項目(1)が新たに設定された。ここでは、自然環境と歴史、日本の歴史と世界の歴史のつながりにかかわる主題を教師が設定し、地図や年表を活用しながら考察する活動を通して、世界史学習の基本的な技能に触れさせることが目標とされている。また、大項目(3)は、「世界史Ａ」の学習のまとめとして位置づけられている。ここでは、現代社会の特質や課題についての主題を生徒が設定し、資料を活用しながら探究し、持続可能な社会の実現について展望させることが目標とされている。

「世界史Ｂ」では主題を設定して行う学習を段階的・継続的に指導することで、歴史学習の基本的技能を習得させること、言語活動を充実させることが図られている。具体的には、大項目(1)のアからウでは、導入時期の学習として、教師が主題を設定し、資料を活用して生徒に考察させる過程を示しながら指導し、地理や歴史への興味・関心を高めることが目指される。大項目(2)のエ、(3)のエ、(4)のオでは、教師が主題を設定し、生徒による追究する活動を通して、年表や地図などに整理して表現したり、資料を多面的・多角的に考察してよみといたりするなどの技能を習得させる。大項目の(5)のオでは、「世界史Ｂ」の学習のまとめとして、生徒自身が主題を設定し、主体的に考察する活動を通して、これまでの学習で習得した知識や技能を活用させることが目標とされている。

以上の改訂の内容を踏まえ、本調査研究では「世界史Ａ」及び「世界史Ｂ」において、資料を基に、その内容をまとめたり、事象の背景や原因を考察したり、それらの結果や自分の考えを表現したりする言語活動を取り入れた実践を行った。

各事例の実践内容は次のとおりである。

事例１　年表や地図を活用して、14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行の背景について考察する授業

「世界史Ａ」において、生徒自身が作成した地図や年表と、これまでの学習で得た知識とを活用して、14世紀のヨーロッパにペストが伝わり、流行した背景について考察し、表現する学習活動を行った。一連の学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、事象の背景を多面的・多角的に考察したりすることを目指した。

事例２　ドレークの航海に関する資料を活用して、航海の目的を考察する授業

「世界史Ｂ」において、ドレークの航海に関するその時代の資料を題材に、資料の内容を読み取り、読み取ったことを踏まえて仮説を立てたり、仮説を発表したりする学習活動を行った。一連の学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、資料の内容を踏まえて事象を多面的・多角的に考察したりすることを目指した。

事例３　19世紀のロンドンに関する絵画資料を活用して、当時の社会の変化を考察する授業

「世界史Ａ」において、19世紀のロンドンに関する絵画資料を題材に、資料の内容をよみとき、よみといたことを踏まえて産業革命による社会の変化について考察し、表現する学習活動を行った。一連の学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、資料の内容を踏まえて事象を多面的・多角的に考察したりすることを目指した。

事例１　年表や地図を活用して、14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行の背景について考察する授業

１　ねらい

新学習指導要領において、「世界史Ａ」では科目の目標に「諸資料に基づき」の語句が加えられた。これを受けて、内容の取り扱いには、内容の全体にわたる配慮事項として、「年表，地図その他の資料を積極的に活用したり，文化遺産，博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして，具体的に学ばせるように工夫すること」が示された。地図や年表の有効性については、平成22年の『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』に、「歴史的事象を時間的，空間的に正しく位置付け，時代背景や地理的条件との関連等を考察する上で有効である」と書かれている。また、地図を活用した学習を一層重視することが、平成20年１月の中央教育審議会答申における高等学校地理歴史科の改善の具体的事項に示され、地図の活用が地理ばかりでなく、世界史や日本史の学習においても重視されるようになった。

これを踏まえて、本事例では、年表や地図を活用して、14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行について考察する授業を行った。年表や地図を作成したり、作成した年表や地図と、これまでの学習で得た知識とを活用して、ペストがヨーロッパに伝わった背景や、ヨーロッパにおいて流行した背景について考察したりする学習活動を行った。また、話合いや考察の過程、さらにはそれらの結果を文章に書かせるなどの言語活動を取り入れた。一連の学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、事象の背景を多面的・多角的に考察したりすることを目指した。

２　授業実践

(1)単元の指導目標

地中海交流圏の成長とモンゴル帝国による陸路のネットワークの整備とによりユーラシア大陸の東西交流が活発化したことが、14世紀のヨーロッパにおけるペスト流行の原因であることを、年表や地図を基に考察させる。

(2)単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行の原因に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行の原因について、地中海交流圏の成長やモンゴル帝国の拡大と関連付けながら、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国に関する情報を、年表や地図にまとめたり、まとめたものから、有用な情報を読み取ったりしている。	・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国に関する基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

(3)指導計画（３時間）

時間	学　習　活　動	評　価　計　画
1	・ペストの原因や症状などの基本的な事柄に関するクイズに答える。 ・ペストが14世紀のヨーロッパで流行した原因について、クイズに答えながら考える。	【関心・意欲・態度】 ・ペストの流行について関心を高め、その背景となった14世紀のヨーロッパの社会の様子について意欲的に考えている。
2	・地中海交流圏の成長に関する情報を、年表や地図にまとめる。 ・年表と地図を参考にして、ペストがヨーロッパに伝わった背景をグループで話し合いながら考え、文章にまとめる。	【資料活用の技能】 ・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国に関する情報を、年表にまとめている。 【思考・判断・表現】 ・グループでの話合いを通して、作成した年表や地図を多面的・多角的に考察し、考察した過程や結果を文章で書いている。
3	・ペストをヨーロッパに伝えたのはどのような人たちか、グループで話し合いながら考える。 ・ヨーロッパにペストが伝わり、流行した背景について、これまでに学習した内容を踏まえて各自で文章にまとめる。	【知識・理解】 ・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国の成立がユーラシア大陸の東西交流を活発化させたことを理解している。 【思考・判断・表現】 ・14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行について、当時のヨーロッパの都市の衛生状態と関連付けて文章で表現している。また、ヨーロッパへのペストの伝播について、東西交流の活発化と関連付けて表現している。

(4)授業の概要

ア　１時間目の授業

１時間目の学習活動は、生徒の関心や意欲を高めることを目標として、クイズに答えさせながら、基本的な事柄を身に付けさせた。２年生の１クラス（20人）を４人ずつの五つのグループに分け、グループの中で話し合わせながら、解答させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・中世ヨーロッパの「ペスト医」の絵を見て、どのような職業か考えたことを発表する。		
展開 45分	・ペストの原因や症状などの基本的な事柄に関するクイズに答える。 ・ペストが14世紀のヨーロッパで流行した原因について、クイズに答えながら考える。	・クイズの内容をスクリーンに映す。 ・ペストによりヨーロッパの総人口の３分の１が死亡したことに触れ、ヨーロッパ	【関心・意欲・態度】 ・ペストの流行について関心を高め、その背景となった14世紀のヨーロッパの社会の様子について意欲的に考えて

		社会の発展に大きな打撃を与えたことを伝え、ペストが流行した原因を追究する意欲を高める。	いる。 〔話合いの様子〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

導入では、インターネットから入手した中世ヨーロッパの「ペスト医」の絵をスクリーンに映し、この人物の職業は何かという発問をした。鳥のようなくちばしの付いた仮面が生徒の興味を引いた。続いて、ペストに関するクイズを行った。その際、出題内容が確実に伝わり、グループで話合いをしている時であっても見られるように、問題をスクリーンに映しておいた。

＜インターネットから入手した中世ヨーロッパの「ペスト医」の絵＞
（http://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Doktorschnabel_430px.jpg）

【この人物の職業は何でしょう？】

中世ヨーロッパの

a.サーカス団員

b.兵士

c.医者

d.錬金術学者

＜スクリーンに映したクイズの問題の例＞

【問題その⑤】

この病気により、14世紀には、ヨーロッパの総人口1億人のうち何人が死亡したでしょうか？

a.100万人　d.1000万人

b.300万人　e.3000万人

c.500万人

答え

e

・総人口の実に3分の1に当たる人々が亡くなったことになります。

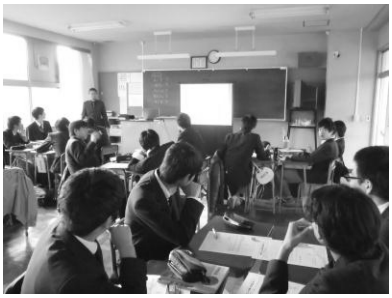
出題したのは以下の11問である。

問題その①「この病気は、何という通称で呼ばれたでしょうか。」
問題その②「この病気は、現在何という名前で呼ばれているでしょうか。」
問題その③「この病気は、もともとどんな動物に多い病気だったでしょうか。」
問題その④「この病気の病原菌を媒介するのはどんな動物でしょうか。」
問題その⑤「この病気により、14世紀には、ヨーロッパの総人口１億人のうち何人が死亡したでしょうか。」
問題その⑥「この病気によって生じた大量の死体を、当時の人々はどうしたでしょうか。」
問題その⑦「中世ヨーロッパでは排泄物をどのように処理していたでしょうか。」

問題その⑧「中世ヨーロッパでは、着替えはどのくらいの頻度でしていたでしょうか。」
問題その⑨「中世ヨーロッパでは、入浴はどのくらいの頻度でしていたでしょうか。」
問題その⑩「中世ヨーロッパの肉屋は、さばいた後の動物の残骸をどのように始末していたでしょうか。」
問題その⑪「中世ヨーロッパでは、ごみの処理や動物の死体の処理をどのように行っていたでしょうか。」

問題その①から問題その⑥は、ペストに関する基本的な事柄を理解させるためのものである。問題その⑦から問題その⑪は、中世ヨーロッパの都市の衛生状態が良くなかったことを生徒に気付かせるためのものである。問題がスクリーンに映されると、どのグループでも正解は何かをめぐって活発な意見の交換が始まっていた。

（スクリーンに映された問題を見る）


（スクリーンでクイズの答えを確認する）

生徒に出題の内容を理解させる上で、スクリーンに問題を映すことは効果があった。また、スクリーンに映すことで、生徒の視線を前に向けることができ、生徒が教師の説明や他のグループの生徒の発表を聞く際に効果があった。

授業中の生徒の様子を見ると、クイズの答えを考えるためにグループで活発に意見の交換をしたり、スクリーンに映し出された画像を熱心に見たりする様子が見られたことから、スクリーンの活用やグループごとの活動が、学習内容に対する生徒の関心や意欲を高めることに効果があったと言える。

イ　２時間目の授業

２時間目は、年表や地図を活用して、ペストがヨーロッパに伝わった理由を考えさせる活動を行った。年表や地図を見ながら、ヨーロッパでペストが流行した時代と、その前の時代とのユーラシア大陸の動きを確認させ、理由を考える際のヒントとした。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・指示に従って年表を作成する。 ・作成した年表と、ワークシート①の地図を参考に、ペストがヨーロ	 ・ペストの発生源と、ヨーロッパの位置を	【資料活用の技能】 ・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国に関する情報を、年表にまとめている。 〔年表〕 【思考・判断・表現】

	ッパに伝わった理由をグループで話し合いながら考え、文章にまとめる。 ・ワークシート①の地図に、モンゴル帝国の領域を示す。	スクリーンに映し、確認させる。 ・モンゴル帝国の領域がヨーロッパに及んでいることに気付かせる。	・グループでの話合いを通して、作成した年表や地図を多面的・多角的に考察し、考察した過程や結果を文章で書いている。 〔ワークシート①〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

展開の初めに年表の作成を行った。十字軍やマルコ＝ポーロ、モンゴル帝国の拡大など、11世紀から13世紀にかけてのユーラシア大陸の交流に関する事柄をあげ、それらの内容を教科書で確認させながら、年表（p12参照）の該当する位置に記入させた。グループでの活動としたが、事柄をアジアの欄とヨーロッパの欄のいずれに記入するかで悩むなど、活動が停滞しているグループもあり、机間指導をしながら資料集や教科書を参考にするよう促した。15分ほどで、ほとんどの生徒が作業を終えた。

次に、ワークシート①（**資料１**）を配布した。ワークシート①にはペストの発生源の位置とヨーロッパの位置とを示した地図を載せた。また、同じ地図をスクリーンに映し、位置関係を確認させた。その後、作成した年表を参考にさせながら、ペストがヨーロッパに伝わった原因について、グループで話し合わせて考察させ、グループとしての意見をまとめさせた。また、グループとしての意見をワークシート①の【考えてみよう：ペストがヨーロッパに伝わった原因は？】の欄に記入させた。15分ほどたってから、各グループの代表にグループとしての意見を発表させた。以下は、発表された内容である。

＜１班＞

ペスト菌が移動してヨーロッパにたどり着き、環境がよかったので住みついた。

＜２班＞

マルコ＝ポーロが帰国したから。

＜３班＞

アジアとの貿易によって感染者がヨーロッパに帰国した時に、病原菌まで入ってきた。

＜４班＞

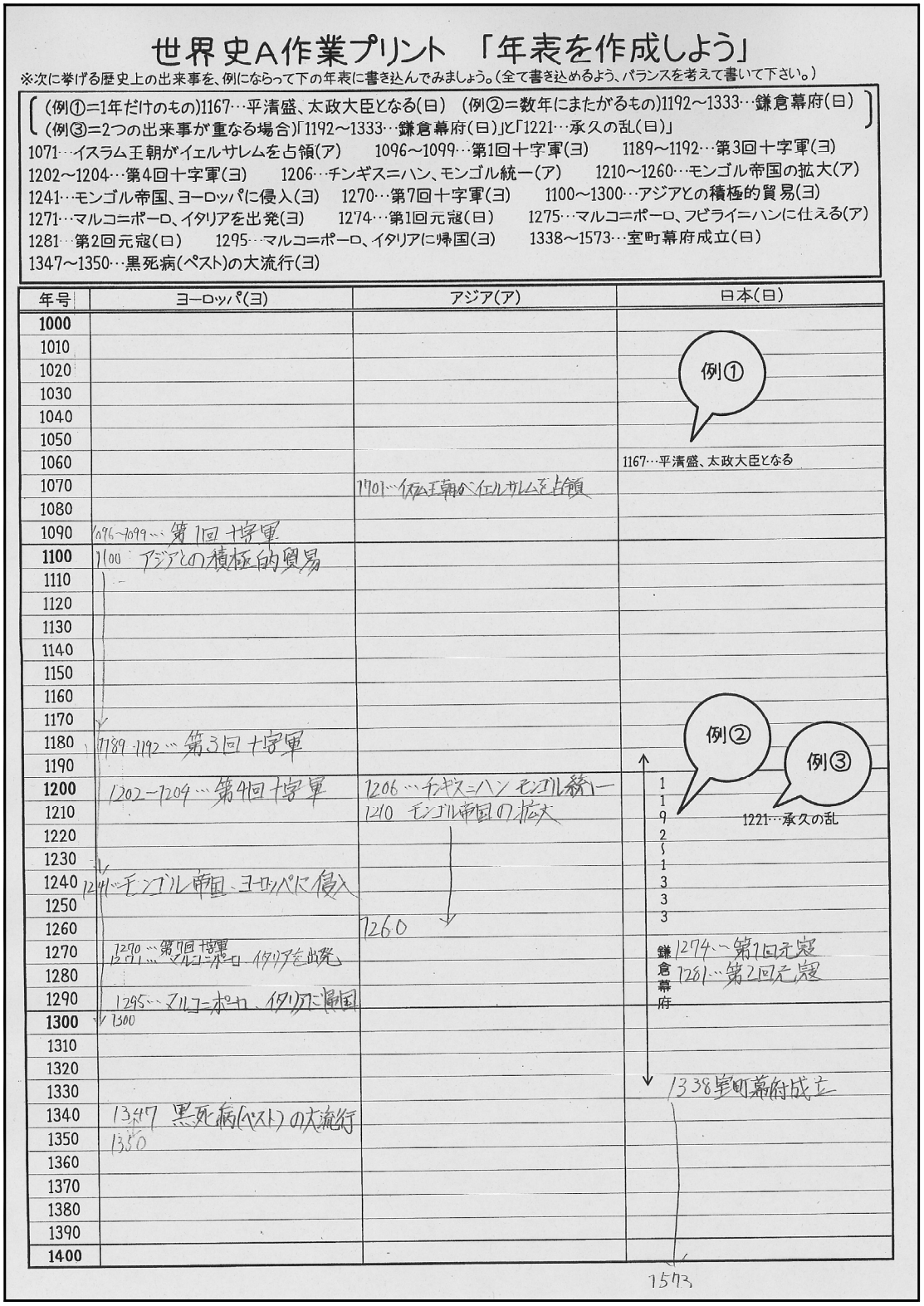
アジアと貿易をしているうちに、輸入品の中にペストを持っているネズミなどが入り込んでいて、ヨーロッパまでペストが来た。

＜５班＞

アジアとの積極的貿易

２～５班は、ヨーロッパとアジアとの交流に着目した内容であった。また、１班の発表に対して、「ペスト菌はどのようにして移動したのか」と質問したところ、「商人が運んできた」と答えた。つまり、この段階において、ペストがヨーロッパに伝わった原因として、ヨーロッパとアジアと間における人やモノの交流があったということが、生徒たちに認識されたと考えることができた。

＜生徒が作成した年表＞



世界史A作業プリント　「年表を作成しよう」

※次に挙げる歴史上の出来事を、例にならって下の年表に書き込んでみましょう。（全て書き込めるよう、バランスを考えて書いて下さい。）

（例①＝1年だけのもの）1167…平清盛、太政大臣となる（日）　（例②＝数年にまたがるもの）1192～1333…鎌倉幕府（日）
（例③＝2つの出来事が重なる場合）「1192～1333…鎌倉幕府（日）」と「1221…承久の乱（日）」

1071…イスラム王朝がイェルサレムを占領（ア）　1096～1099…第1回十字軍（ヨ）　1189～1192…第3回十字軍（ヨ）
1202～1204…第4回十字軍（ヨ）　1206…チンギス＝ハン、モンゴル統一（ア）　1210～1260…モンゴル帝国の拡大（ア）
1241…モンゴル帝国、ヨーロッパに侵入（ヨ）　1270…第7回十字軍（ヨ）　1100～1300…アジアとの積極的貿易（ヨ）
1271…マルコ＝ポーロ、イタリアを出発（ヨ）　1274…第1回元寇（日）　1275…マルコ＝ポーロ、フビライ＝ハンに仕える（ア）
1281…第2回元寇（日）　1295…マルコ＝ポーロ、イタリアに帰国（ヨ）　1338～1573…室町幕府成立（日）
1347～1350…黒死病（ペスト）の大流行（ヨ）

年号	ヨーロッパ（ヨ）	アジア（ア）	日本（日）
1000			
1010			
1020			例①
1030			
1040			
1050			
1060			1167…平清盛、太政大臣となる
1070		1071…イスラム王朝がイェルサレムを占領	
1080			
1090	1096～1099…第1回十字軍		
1100	1100 アジアとの積極的貿易		
1110			
1120			
1130			
1140			
1150			
1160			
1170			
1180	1189～1192…第3回十字軍		例② 例③
1190			
1200	1202～1204…第4回十字軍	1206…チンギス＝ハン モンゴル統一	1192～1333
1210		1210 モンゴル帝国の拡大	1221…承久の乱
1220			
1230			
1240	1241…モンゴル帝国、ヨーロッパに侵入		
1250			
1260		1260	
1270	1270…第7回十字軍 1271…マルコ＝ポーロ イタリアを出発		鎌倉幕府 1274…第1回元寇 1281…第2回元寇
1280			
1290	1295…マルコ＝ポーロ、イタリアに帰国		
1300	1300		
1310			
1320			
1330			1338室町幕府成立
1340	1347 黒死病（ペスト）の大流行		
1350	1350		
1360			
1370			
1380			
1390			
1400			1573

続いて、ワークシート①の地図にモンゴル帝国の領域を、教科書を参考にさせながら色で塗らせた。これまでの学習で、生徒たちは、十字軍遠征による東方貿易の活発化、特にヴェネチア商人による東方貿易における覇権の確立と、モンゴル帝国が領域内に駅伝制を整備したことによるアジアとヨーロッパの交流の活発化、そのネットワークの西端にある東方貿易の一層の活発化について学習している。この作業は、それらの学習内容を踏まえて、ペストの発生源とヨーロッパとを緊密に結びつけたのが、モンゴル帝国によるユーラシア大陸の支配であったことに気付かせることを目的として行った。

資料１

世界史Ａワークシート①　　２年　　組　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ペストがヨーロッパに伝わった理由

【考えてみよう：ペストがヨーロッパに伝わった原因は？】

ペスト菌がヨーロッパに伝わった方法や経路について考えて、書いてみましょう。

【作業：＿＿＿＿＿＿の領域】

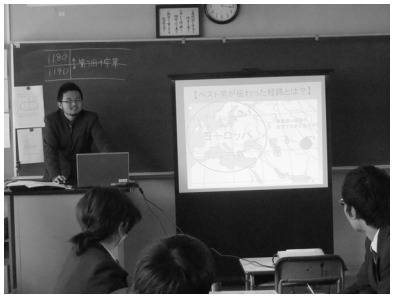
上の地図に、＿＿＿＿＿＿の領域を示しましょう。（教科書を参考に）

【考えてみよう：＿＿＿＿＿＿の成立の影響】

＿＿＿＿＿＿とヨーロッパとの関係はどうなっていますか。作業を通して気付いたことを書いてみましょう。

生徒が作業を終えたのを確認してから、スクリーンにモンゴル帝国の領域が示された地図を映し、各自の作業の結果を確認させた。その際に、「モンゴル帝国の領域の西端はどこまで及んでいるか」と発問し、帝国の領域が東ヨーロッパや黒海沿岸にまで及んでいることに気付かせた。

（年表を作成している様子）


（地図を映しながら説明）

（教科書を参考に地図作業）

ウ　３時間目の授業

３時間目は、ペストの伝播ルートを確認させた上で、これまでの学習で得られた情報を踏まえて、ヨーロッパにペストが伝わり、流行した経緯を各自で文章にまとめさせる活動を行った。

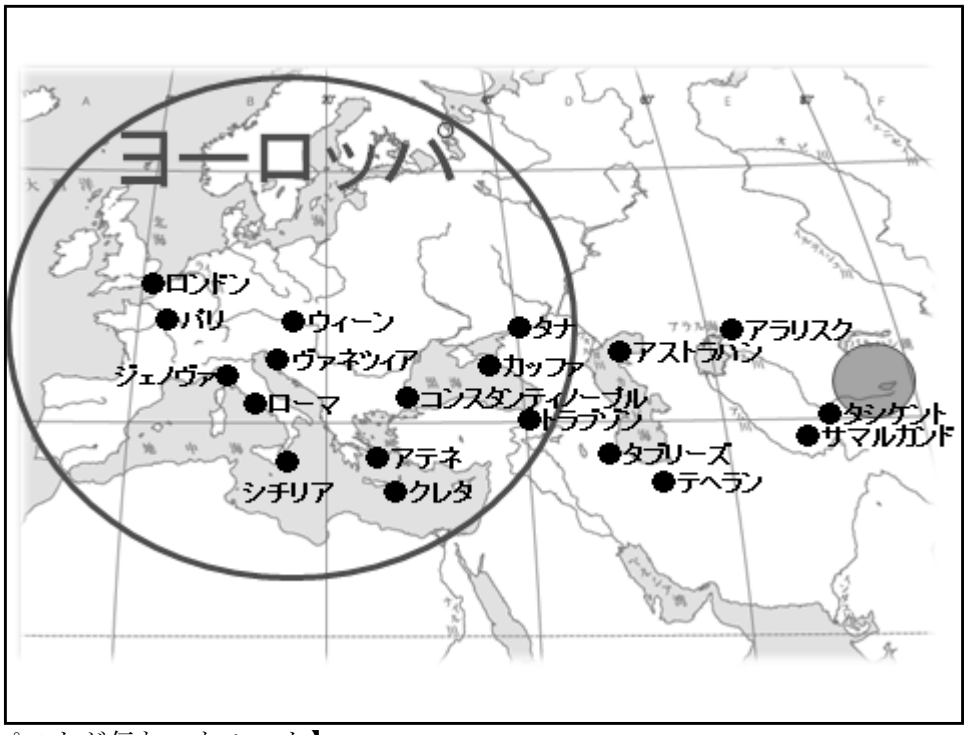
時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・ペストがヨーロッパまでどのようなルートで伝わったのか、ルートをワークシート②の地図に記入して確認する。 ・作業した地図を見て、そのルートを通ってペストをヨーロッパに伝えたのはどのような人たちか、グループで話し合いながら考える。 ・グループの意見を発表する。 ・ヨーロッパにペストが伝わり、流行した経緯について、これまでに学習した内容を踏まえて各自で文章にまとめる	・スクリーンに地図を映す。 ・ルートが黒海や地中海沿岸の港を結んでいることに気付かせる。 ・前時に作成した年表やモンゴル帝国の領域について作業した地図も参照させる。	【知識・理解】 ・地中海交流圏の成長やモンゴル帝国の成立がユーラシア大陸の東西交流を活発化させたことを理解している。 〔ワークシート②〕 【思考・判断・表現】 ・14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行について、ヨーロッパの都市の衛生状態と関連付けて文章で表現している。また、ヨーロッパへのペストの伝播について、東西交流の活発化と関連付けて文章で表現している。 〔ワークシート②〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

最初に、ワークシート②（**資料２**）の【作業：ペストが伝わったルート】を行わせた。ワークシート②に、ペストの伝播ルート上の都市を、伝わった順番が分かるように示した。それを見ながら地図中に示した都市を矢印で結ぶ作業を行わせた。どの生徒も丁寧にルートをたどり、中にはルートごとに異なる色のペンを使うといった工夫をしている生徒も見られた。

資料２

世界史Ａワークシート②　　２年　　組　氏名

ペストがヨーロッパに伝わった背景



【作業：ペストが伝わったルート】

次に示すとおりに上の図にある地名を矢印で結んでみましょう

ルート①…発生源→タシケント→サマルカンド→テヘラン→タブリーズ→トラブゾン

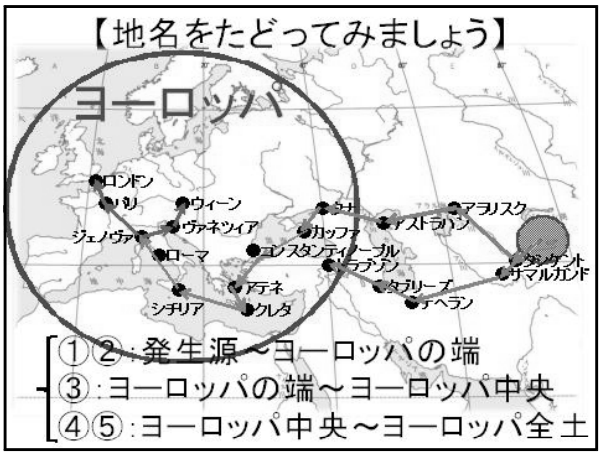
ルート②…発生源→タシケント→アラリスク→アストラハン→タナ→カッファ→コンスタンティノープル→アテネ→クレタ→シチリア→ジェノヴァ

【考えてみよう：ペストを伝えたのは誰か？】

上の地図に示したルートを頻繁に行き来したのは、どのような職業の人たちでしょうか。

【今回学習した内容を文章でまとめてみましょう。】

10分ほどたってから、ルートを示した地図をスクリーンに映し、ルートを確認させた。そのあとで、ワークシート②の【考えてみよう：ペストを伝えたのは誰か？】を、グループで話し合いながら行わせた。机間指導をして状況を確認すると、「商人」ではないかと答えていたのは５班のみであった。そのグループの生徒に理由を聞くと、「カッファやコンスタンティノープル、ヴェネチアなどイタリア商人の貿易港を通っているから」とのことであった。一方、他のグループでは「軍人」、「皇帝の召使」、「盗賊」といった解答が書かれていた。それぞれのグループに解答の理由を聞くと、地図に示されたルートとの関連を考慮していないことが分かった。



作業が終了したのを確認し、それぞれのグループに話し合った結果を発表させた。５班の生徒が、地図から得られる情報を生かして、「商人」と予想したという発表をしたところ、それ対して多くの生徒がうなずいていた。

発表が終了したあと、一連の学習で得た情報をもとに、ワークシート②の【今回学習した内容を文章でまとめてみましょう。】を行わせた。グループ学習の形態になっていた席をもとの状態に戻し、各自で文章にまとめさせた。生徒が記入したものの中からいくつか紹介する。

＜生徒１＞

モンゴル帝国の建国で人の流れや物の流れが活発になり、病気などがまんえんしてしまったことなどが分かった。商人が貿易の時に持ちこんでしまった

上の文章を書いた＜生徒１＞は、４班で活動してきた生徒である。４班は、２時間目の【考えてみよう：ペストがヨーロッパに伝わった原因は？】では、「アジアと貿易をしているうちに、輸入品の中にペストを持っているネズミなどが入り込んでいて、ヨーロッパまでペストが来た」という意見を書いていた。したがって、この生徒は、３時間目の発表から「商人」の語を使用して、文章を書くことができた。

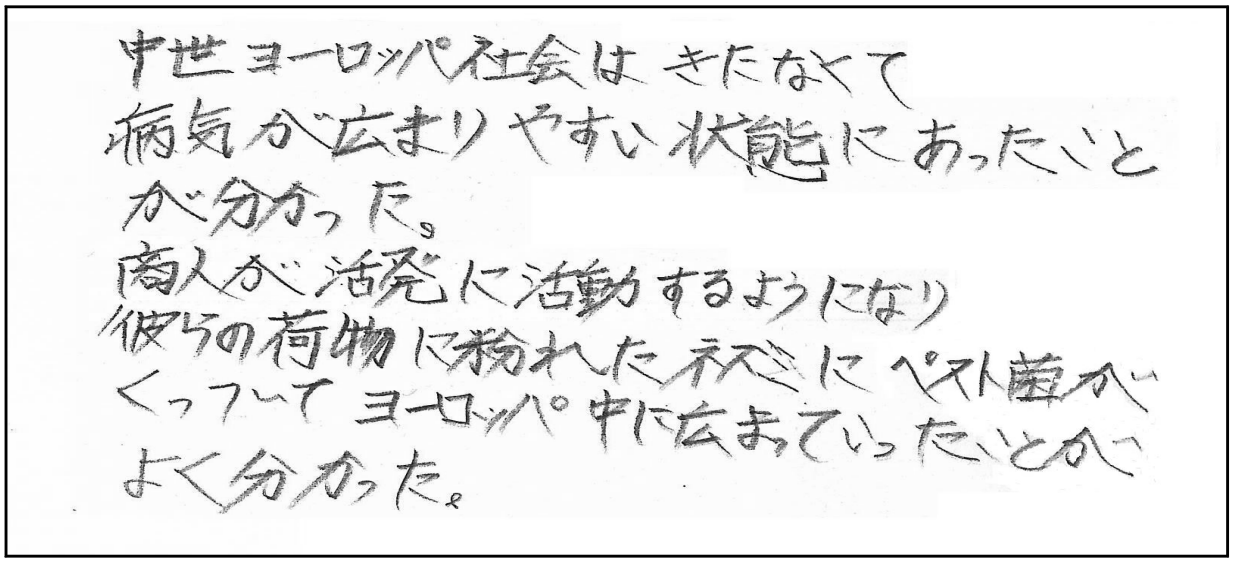
＜生徒２＞

モンゴル帝国の成立や、ヨーロッパの衰退によって人や物の移動により、ペストがヨーロッパ諸国に広まっていったこと。

商業が活性化したことで、イタリアなどの商人が活発になり、荷物に紛れたネズミにくっついたペスト菌がヨーロッパ中に広まっていった

＜生徒２＞は３班で活動してきた生徒である。３班は、２時間目の【考えてみよう：ペストがヨーロッパに伝わった原因は？】では、「アジアとの貿易によって感染者がヨーロッパに帰国した時に、病原菌まで入ってきた」という意見を書いていた。また、３時間目の【考えてみよう：ペストを伝えたのは誰か？】では、「軍人」と発表していた。つまり、アジアとの交流に注目しながらも、その視点を３時間目の考察に生かせなかったと言える。しかし、３時間目の発表を聞くことで、「アジアとの交易」を「商業の活性化」や「イタリアなどの商人」と具体化し、それを踏まえて文章を書くことができた。しかし、前半の文章との関連が読み取れず、モンゴル帝国の拡大と商業の活性化とを結びつけることができていないと考えられる。

＜生徒３＞


中世ヨーロッパ社会はきたなくて
病気が広まりやすい状態にあったことが分かった。
商人が活発に活動するようになり
彼らの荷物に紛れた衣にペスト菌がくっついてヨーロッパ中に広まっていったことがよく分かった。

＜生徒３＞は２班で活動してきた生徒である。２班は、２時間目の【考えてみよう：ペストがヨーロッパに伝わった原因は？】では、「マルコ＝ポーロが帰国したから」という意見を書いていた。ヨーロッパとアジアとの交流に注目し、さらに年表から関連すると思われる事柄を見つけ出すことができていた。３時間目の発表を聞いて、マルコ＝ポーロを含めた商人の交流の活発化に触れた文章を書くことができるようになった。発表の効果が大きかった例と言える。

生徒が書いた文章の内容を分類すると、多くの生徒が上にあげた例のように、モンゴル帝国の成立による交易の活発化や、中世ヨーロッパの都市の衛生状態のいずれかに触れた文章を書いていた。特に、中世ヨーロッパの都市の衛生状態については、「中世ヨーロッパでは、排泄物やゴミを道に捨てたままで、環境はとても最悪で、きたなかった。」とか「中世ヨーロッパはとてもきたなく、国はまわりがカベで囲われていて風通しがわるく、病気もはやりやすかった。」など、多くの生徒が触れていた。これは、１時間目に行った、クイズによる学習の効果が３時間目にも生かされた結果であると言える。

(5)生徒による授業評価

３時間目の終了後、用紙を配布して今回の授業に対する感想を文章で書かせた。以下はその例である。

・年表を作成して、日本がこんなことをやっていたときの、ヨーロッパやアジアの出来事が分かった。

・年表作成が面倒だったが、その年表が役に立った。
・文明というか、時代の発展には、必ず負の連鎖があることが分かった。今の環境問題と似ていると思った。
・ヨーロッパは黒死病の被害にあいながらも、今のヨーロッパまで再生したことはすごいと思った。
・今は発展しているヨーロッパにも、こういう時代があったということが分かった。年表を作ってみて、ヨーロッパ、アジア、日本ではかなり差があることが分かった。
・歴史ってこういう風に見ると、横でつながっているんですね。

感想からは、年表を作成したことにより、同時代の世界の諸地域を比較する視点を生徒がもてるようになったことが読み取れる。また、環境問題や現在のヨーロッパと関連させるなど、学習した内容を自身が生きている時代から見ていることも読み取れる。

3　まとめ

(1)成果

本事例では、年表や地図を作成したり、作成した年表や地図を活用したりして、14世紀のヨーロッパにおけるペストの流行について考察する授業を行った。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、事象の背景を多面的・多角的に考察できたりすることを目指した。

１時間目の授業中における生徒の様子を見ると、スクリーンを活用したクイズ形式によって、導入の段階における生徒の関心や意欲を高めることができた。３時間目の最後に書かせた文章にも、１時間目の内容を踏まえたものが多かったことから、スクリーンを活用したクイズ形式の効果があったと言える。また、２時間目と３時間目のグループでの話合いにおいては、どのグループでも活発な議論が行われていたことから、１時間目で高まった関心や意欲は、その後も持続していたこと考えられる。

また、年表や地図を活用したり、他のグループの発表を聞いたりすることで、ペストがヨーロッパに伝わったり流行したりしたことの背景を多面的・多角的に考えることができた。このことは、既に紹介した生徒によるまとめの文章において、多くの生徒が、自分たちの所属するグループでの話合いから得られた情報と、３時間目の他のグループの発表から得られた情報を踏まえて文章を書いていることに表れている。

年表や地図の活用については、本事例では教科書や資料集に掲載されているものを使用するのではなく、生徒自身に年表を作成させたり、地図に必要な情報を書き込ませたりする作業を取り入れた。教師が必要な情報を与えて、年表や地図を作成させることは、生徒が学習の内容との関連に気付いたり、情報を読み取って考察を進めたりする上で効果的であると考えたためである。特に、生徒の感想を紹介した際に触れたように、関連する項目のみに絞った年表を自分で作成することは、同時代の横のつながりに生徒の目を向けさせる上で効果があった。この同時代の横のつながりの視点は、２時間目以降の考察の際のヒントとなって生かされた。

(2)課題

今回の事例では、年表や地図を活用して考察を進めることが活動の中心であった。２時間目の授業においては、ペストの発生源がアジアにあることから、アジアとヨーロッパを結びつける事柄を、作成した年表から選び出す作業を行った。多くの生徒がマルコ＝ポーロや東方貿易など、

関連する事柄を選ぶことができ、効果的な活用が行われた。

しかし、３時間目の授業で行った、ペストが伝わったルートを示す地図の活用では、ルートがイタリア商人のネットワークと一致していることに気付いたのは一つのグループのみであった。多くの生徒が、イタリア商人による東方貿易についての授業で得た知識が身に付いていなかったり、地図に示されたルートとの関連に気付くことができなかったりしたことがその原因と考えられる。このことから、地図から必要な情報を読み取らせるには、視点を明確にする必要がある。この事例の場合には、ワークシートに「ルートはどのような都市を結んでいるか気付いたことを書いてみよう」といった問いを設けるなどの工夫が考えられる。また、この事例の前に実施する東方貿易に関する授業においても、地図の作業を取入れるなどの工夫をすることで、生徒自身が地図を読み取る視点に気付くことができると考えられる。

事例２　ドレークの航海に関する資料を活用して、航海の目的を考察する授業

１　ねらい

新学習指導要領において、世界史Ｂでは、すべての大項目に主題を設定して行う学習が置かれた。その一つとして、16世紀から19世紀までの世界の動向を扱う大項目「(4) 諸地域世界の結合と変容」には、中項目「オ　資料からよみとく歴史の世界」が置かれた。その目標は、「主題を設定し，その時代の資料を選択して，資料の内容をまとめたり，その意図やねらいを推測したり，資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して，資料を多面的・多角的に考察し，よみとく技能を習得させる」とある。ここでは、この大項目で扱う内容の中から、教師が主題を設定して、その時代の資料を取り上げ、生徒にその内容や意図、ねらいなどについて多面的・多角的に考察させる活動を行うことが示されている。

これを踏まえて、本事例では「ドレークを通して見る16世紀のイギリスの海外進出」という主題を設定し、「その時代の資料」としてドレークの航海に関する資料を取り上げた。航海の目的について仮説を立て、資料の内容を読み取り、読み取ったことを基に仮説を検証したり、疑問に思ったことを調べたり、それらの結果を発表したりする学習活動を行った。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や意欲を高めたり、資料の内容を読み取ったり、資料を多面的・多角的に考察できたりすることを目指した。

２　授業実践

(1)単元の指導目標

16世紀のイギリスが、スペインに対抗しながら積極的な海外進出を開始したことを、ドレークの航海に関する資料をよみとくことを通して考察させる。

(2)単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・16世紀のイギリスの海外進出に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・16世紀のイギリスの海外進出について、その時代の文字資料を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・16世紀のイギリスの海外進出について、その時代の文字資料から、有用な情報を読み取ったり、文章にまとめたりしている。	・16世紀のイギリスの海外進出について、スペインとの勢力関係を理解し、その知識を身に付けている。

(3)指導計画（３時間）

時間	学　習　活　動	評　価　計　画
1	・ドレークの航海ルートを確認しながら、当時の国名を記入する。 ・各自で仮説を立てる。	【知識・理解】 ・イギリスやスペイン、明の位置や、アメリカ大陸にスペインの植民地があることを理解している。 【関心・意欲・態度】 ・ドレークの航海についての関心を高め、意欲的に航海の目的を考えている。
2	・ドレークの航海に関する資料を読	【資料活用の技能】

	み、内容をまとめる。 ・資料に基づいてグループで話し合いながら仮説を立てる。	・ドレークの航海に関する資料から、ドレーク一行がスペインが支配しているアメリカ大陸で、銀などを奪ったことを読み取っている。 【思考・判断・表現】 ・グループでの話合いを通して、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を文章で書いている。
3	・グループの仮説を発表する。 ・発表を聞いて各自で航海の目的を考え文章にまとめる。	【思考・判断・表現】 ・イギリスとスペインとの対抗関係を踏まえ、ドレークの航海の目的について考察し、表現している。

(4)授業の概要

本実施校では、「世界史Ｂ」は選択科目であるので、３年生のＡ組とＢ組、合計17名の生徒に対して実践した。

ア　１時間目の授業

１時間目の学習活動は、ドレークやその航海に対する生徒の関心や意欲を高めることを目標の一つとした。ワークシート№.１（**資料１**）にドレークの肖像画を載せ、その生涯について説明した。また、航海ルートを示す地図の作業を通して、各自で航海の目的を考察させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・「海賊」という言葉から連想することをワークシート№.１に書く。		
展開 45分	・ドレークの肖像画を見て受けた印象をワークシート№.１に書く。 ・ドレークの生涯に関する話を聞き、内容をワークシート№.１に書く。 ・地図に示された、ドレークの航海ルートを確認しながら、①から④に当てはまる国名を記入する。 ・ドレークの航海の目的を二つ考え、ワークシートに書く。	・活発な発言が出るよう自由に記入させる。 ・イギリス、スペイン、明の位置やアメリカ大陸にスペインの植民地があることを確認させる。	【知識・理解】 ・イギリスやスペイン、明の位置や、アメリカ大陸にスペインの植民地があることを理解している。 〔ワークシート№.１〕 【関心・意欲・態度】 ・ドレークの航海についての関心を高め、意欲的に航海の目的を考えている。 〔ワークシート№.１〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

資料１

ワークシート「ドレークの航海」　　No.１

３年　　組　氏名

１　「海賊」と聞いて連想することを書こう。

２　ドレークについて

肖像画を見ての印象は？

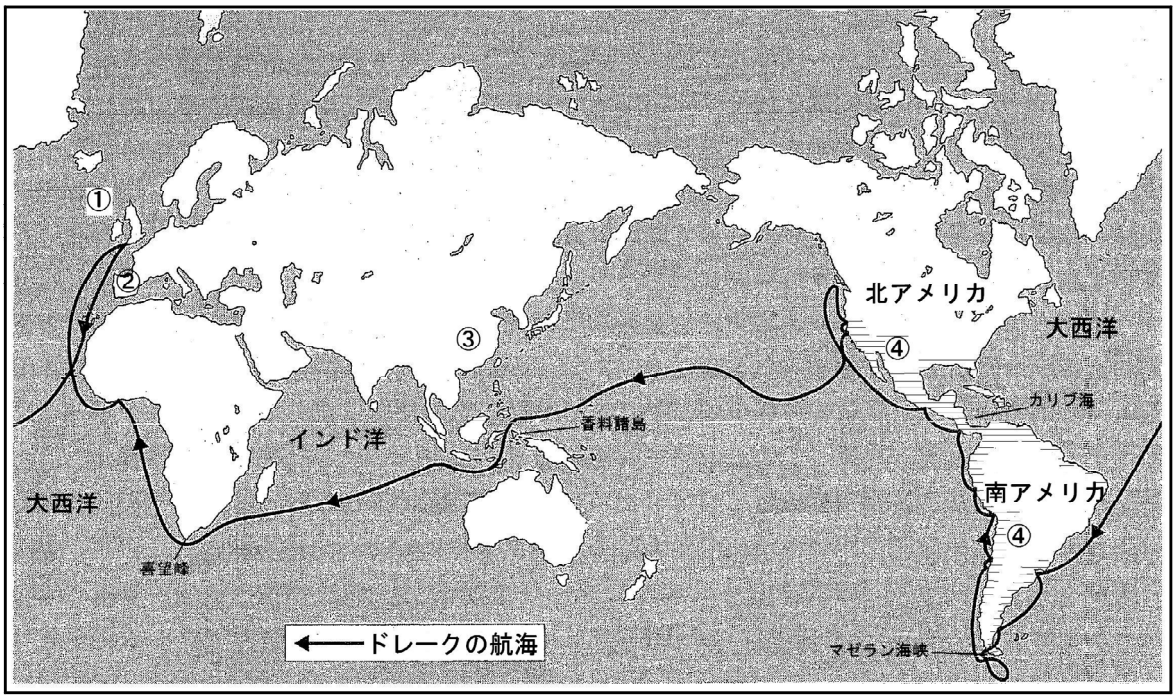
（肖像画）

生涯について（メモを取ろう）

①生い立ち

②海賊になるまで

３　下の地図の①～④に当てはまる国の名称を書こう。



４　ドレークの航海の目的を２つ、各自で考えてみよう。

①

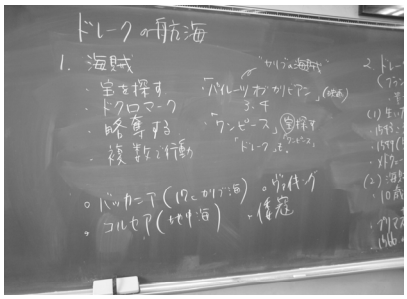
②

導入の活動は、生徒が映画の話題やアニメーションの話題を出すなどして、その後の発言しやすい雰囲気を作る上で効果があった。また、展開の最初で行った、肖像画から受ける印象を書く作業にも意欲的に取り組んでいた。ドレークの生涯に関しては、教師が以下の内容を説明した。

＜ドレークの生涯＞
・1543年ころイギリス南西部で生まれる
・家は小作農家、12人兄弟
・10歳のころから家計を助けるため帆船で下働き
・ジョン＝ホーキンズの船団に参加
・1566年から船長として各地を航海

ジョン＝ホーキンズについては、ドレークと同様、海賊であることを説明した。

続いて行った地図を使った作業は、教科書や資料集を見ながら、当てはまる国の名称を記入する生徒の様子が見られたことから、学習した知識の確認や当時の世界の状況を把握するのに効果があったと考えられる。なお地図には、ドレークの航海ルートが示されている。作業をしながら、ドレークが中南米のスペイン領沿岸に何か所も立ち寄っていることに気付くことができれば、航海の目的を考える手がかりになると考えた。



（生徒があげた「海賊」から連想すること）

（航海の目的を各自で考え文章で書く）

この時間の中心となる学習活動は、ドレークの航海の目的を二つ考えることである。生徒は、ペルー（スペイン領植民地）のポトシ銀山といった既に学習した内容や、ワークシート「ドレークの航海」№.１（**資料１**）の地図を活用しながら、ドレークの航海の目的を二つ考えることができると考えた。

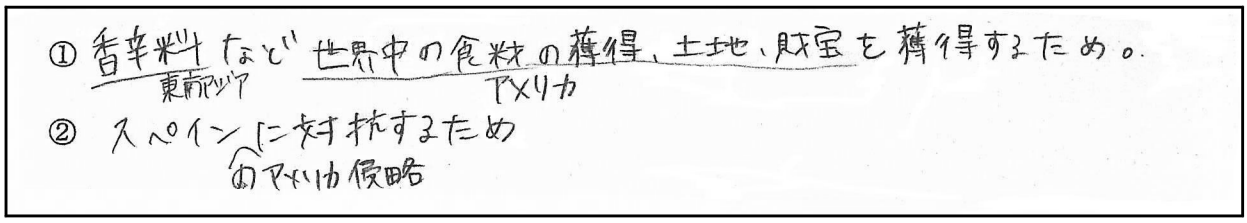
以下は、ドレークの航海の目的について生徒が書いた文章の例である。

①特にスペイン領の南北アメリカの財宝を略奪しようとした。

② 世界の海　周辺をよく視察して、財宝をとりやすい場所を見つけ、どのルートで逃げすれば捕まらないかなどの見当をつけた。後継者に伝える。

① 途中の邪魔な国を攻撃しながら世界一周

② 商業の発達した国との交易。



生徒が書いたドレークの航海の目的は次の六つに分類できる。スペイン領となっている中南米の土地や財宝を奪うことやスペインとの対抗など、スペインとの関係について触れている生徒は９名いた。さらに、香辛料の獲得について触れた生徒も６名と多かった。香料諸島に注目し、大航海時代の学習で得た知識を活用した解答である。

・アメリカ大陸のスペイン領の土地や財宝を奪うため…６名
・香辛料を獲得するため　…６名
・植民地を獲得するため　…４名
・アメリカ大陸に進出するため　…４名
・スペインに対抗するため　…３名
・世界一周をするため　…２名
・その他　…７名

多くの生徒が、スペインとの関係や香辛料の獲得など、これまでの学習で得た知識を活用して文章を書くことができた。

イ　２時間目の授業

２時間目はグループによる活動である。２～３名のグループを六つ作らせ、ワークシート「ドレークの航海」№２（**資料２**）と資料「ドレークの航海に関する資料」（**資料３**）を配布した。資料を読み、その内容を①資料の舞台はどこか、②ドレーク一行は何をしたかの２点についてワークシートにまとめさせた。さらに、まとめた内容を踏まえて、ドレークの航海の目的は何かについて、グループでの話合いを通して仮説を立てさせた。話合いの中で、生徒たちが海外進出において優位に立つスペインへの対抗や、ポトシ銀山との関連に気付くことを期待した。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・資料に関する教師の説明を聞く。	・資料の性格について、同時代のものであることと、ドレーク自身による訂正が加わ	

	・資料を読み、ワークシート№.２にその内容をまとめる。 ・グループで話し合いながら、ドレークの航海の目的について、仮説を立てる。	っていることに注目させる。 ・机間指導を行い、読み取りや話合いに行き詰まっているグループに対してヒントを与える。	【資料活用の技能】 ・ドレークの航海に関する資料から、ドレーク一行がスペインが支配しているアメリカ大陸で、銀などを奪ったことを読み取っている。 〔ワークシート№.２〕 【思考・判断・表現】 ・グループでの話合いを通して、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を文章で書いている。 〔ワークシート№.２〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

資料については、教師が以下の内容を説明した。

＜資料について＞
・資料名：「サ・フランシス・ドレイク―再評価」
・内容：ドレークが1572年から1573年にかけて行った航海の記録。航海に同行した船乗りたちから得た情報を編集し、ドレーク自身が大幅に訂正して成立した。ドレークの死後、1626年にイギリスで出版された。
・前回のワークシートで示した世界周航（1577年～1580年）の４年前の航海であるが、航海の目的は同じである。

資料の出典は越智武臣、朱牟田夏雄、中野好夫『大航海時代叢書（第Ⅱ期）17　イギリスの航海と植民１』岩波書店、1983年、429頁～430頁、及び451頁～452頁である。主な内容は上述のとおりである。1572年から1573年にかけて、ドレークが行ったパナマ航海の様子を記したものである。当時パナマはスペインの植民地であり、同じスペイン領にあるペルーのポトシ銀山で産出された銀の本国への積み出し港があった。ポトシ銀山で産出された銀は、太平洋上を船で輸送され、パナマの南岸でいったん陸揚げされる。そこから騾馬（らば）（雌のウマと雄のロバの雑種）で陸路を北上し、パナマ北岸の港で本国へ向かう船に積まれたのである。ドレークは、この陸路で、銀の輸送中であった隊列を襲撃した。

教師による説明が終わると、早速生徒は友人と話合いをしながら、資料を読む作業を始めた。文字資料に対して抵抗を感じる生徒が多いのではないかと予想したが、どのグループでも活発な活動が行われていた。机間指導をして生徒の様子を見ると、資料の中に出てくる「金銀」、「銀」、「スペイン本国」、「パナマ」といった語句に印を付けている生徒が多く見られた。Ａ組の２班と３班では、資料からドレーク一行の中にフランス兵がいることを読み取り、イギリスがフラン

資料２

ワークシート「ドレークの航海」　　№.２

３年　　組　氏名

１　ドレークの航海に関する資料を読み、以下の点を調べよう

（１）資料の舞台はどこか？

（２）ドレーク一行は何をしたか？

２　グループとしての仮説を２つ立てよう。（ドレークの航海の目的は？）

①

②

３　他のグループの発表内容をメモしよう。

４　他のグループの発表を評価しよう。

	評価（A、B、C）	評価の理由
１班		
２班		
３班		

５　ドレークの航海の目的を、２つ書いてみよう。

①

②

資料３

ドレークの航海に関する資料

というのは、パナマからベンタ・クルスへの旅は（距離は六リーグ）、通常夜間というのがつねだった。つまり、その間は終始草原地だけに、昼間は猛烈な酷暑というわけ。ところが、逆にベンタ・クルスからノンブレ・デ・ディオスまでは、これも同様陸路での運搬ではあったが、大体いつも日中ばかり、夜間のそれは行わなかった。というのは、道中は終始密林ばかり、おかげで涼しく快適だったからだ―ただ悩みの種は一つ、もしかするとシマローンたちの襲撃に遭い（事実ときにあったのだ）、肝を冷やすこともあるからである。そんなわけで、これら搬送騾馬隊には彼等も必ず護衛隊をつけていた。

（中　略）

さて、一同この森で身支度を整えると、日没前約一時間という頃、また一人スパイを送り出した。日没前には市内に潜入できようとの計算だったのだが、果してその通りやってのけた。そしてまもなく帰って来て、運よく仲間たちに会って知りえた情報というのを、そのまま伝えてくれた。それによれば、リマ市駐在の財務官は、スペイン本国へ帰る第一便の通報船（それは三五〇トンの実に立派な船だった）に乗船すべく、まさに今夜、娘と家族たちとを連れノンブレ・デ・ディオスに向け出発するところだという。これには一四頭の騾馬群が同行し、うち八頭には黄金を積み、一頭には宝石類が積まれているし、さらにほかにもそれぞれ五〇頭の騾馬から成る二隊の搬送隊が編成されており、大部分は糧食類が積み荷だが、中には多少の銀を積んだのもいる。そしてこの二隊も今夜、相前後して出発のはずだというのだ。

（中　略）

近づく搬送隊は三隊だった。一隊は騾馬五〇頭、あとの二隊はそれぞれ七〇頭、一頭ごとに銀三〇〇ポンドは積んでいるわけだから、総計すれば三〇トン近くにはなる勘定。さっそくわれらは態勢を整え、鈴音をたよりに街道の方へと降って行った。そしてそこで待っていると、まもなくそれがなんの金属で出来ているかまでわかるほどになった。すかさずわれらは先頭と最後尾との騾馬群の頭をしっかと押さえたので、これも彼等の習性なのだが、あとの騾馬どもも歩みを止めて坐りこんでしまった。これら三隊の搬送隊には、それぞれに一五名づつ、合計四五名ほどの護衛兵がつけられていたが、そこで暫時は双方銃弾と矢とによる交戦になった。そしてこの交戦で例のフランス隊長は、霰弾を腹部に受け重傷を負うし、シマローンも一人が戦死した。だが、結局は護衛兵たちの方で、ここは騾馬群を棄てて逃げ、救援は他に求めるのが得策とでも考えたらしい。そこでその間にわれらは、特に重そうな荷を背負っていた騾馬何頭かを選び、骨は折れたがなんとか積み荷はおろした。が、とにかく疲れたので、まずはわれらで運べそうな量だけの金の延べ棒、輪など何個かを奪うことで満足した。そして残りほぼ一五トンほどの銀は、一部は巨大なオカガニの群がつくった地面の穴に、また一部はあたり一面に倒れていた老木の下に、さらに一部は川砂、川砂利の中、あまり水の深くない場所を選んで埋めた。

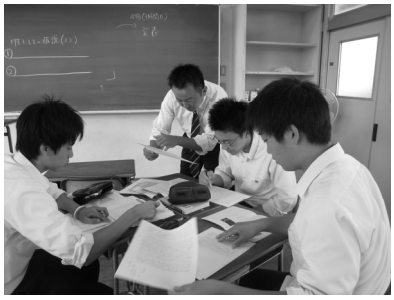
＜出典＞中野好夫『大航海時代叢書（第Ⅱ期）17　イギリスの航海と植民１』岩波書店、1983年、429～430ページ、451～452ページ。

スと連携して、スペインに対抗しているのではないかという話題が出ていた。Ｂ組では、２班の話合いの中で、オランダ独立戦争においてイギリスとスペインが対立したことや、スペインの無敵艦隊をイギリス海軍が撃破したことなどから、その直前のドレークのパナマ遠征の時点でイギリスとスペインの対抗関係があったのではないかという推測をしていた。このように、学習した内容も踏まえながら、資料を多面的・多角的に考察し、仮説を立てる活動が行われている様子が見られた。

また、資料には、「ベンタ・クルス」や「ノンブレ・デ・ディオス」といった細かい地名や、「シマローン」（逃亡した奴隷）や「騾馬」といった聞きなれない語句、さらにはスペインやフランスといった国名も出てくるため、読み取りが進まないグループもあった。机間指導をしながら、質問に答えたり、資料の読み取りのヒントを与えるなど、活動が円滑に進むよう支援した。

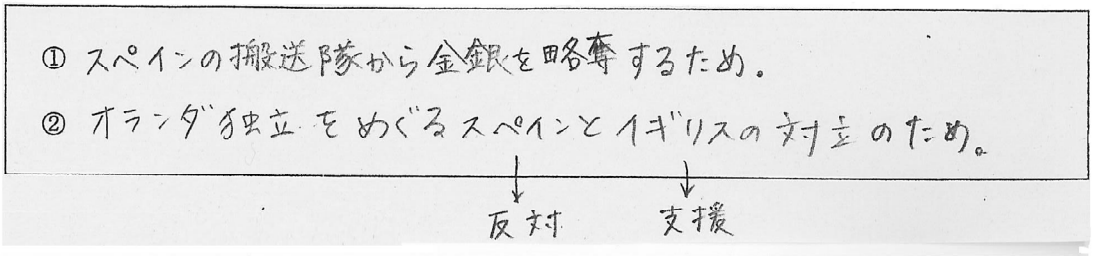
（資料を読む活動の様子）

（議論して仮説を立てる）



（資料の読み取りにヒントを与える）

まとめの段階において、ワークシート№.２の「（１）資料の舞台はどこか？」について、パナマであることを確認した。さらに、前時に使用したワークシート№.１にある世界地図で、パナマの位置も確認させた。授業が終了した時点で、グループの仮説の記入は、ほとんどのグループが完了していた。以下は、ワークシート№.２に書かれた仮説の例である。３時間目の授業では、これに基づいて、発表を行った。



ウ　３時間目の授業

３時間目は、前時の活動で立てた、ドレークの航海の目的についてのグループとしての仮説を発表させた。その発表を踏まえて、改めてドレークの航海の目的は何か、各自で文章に表現させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・ドレークの航海の目的について、グループの仮説を発表する。	・発表、板書、発表内容の確認などの役割分担をさせておく。	

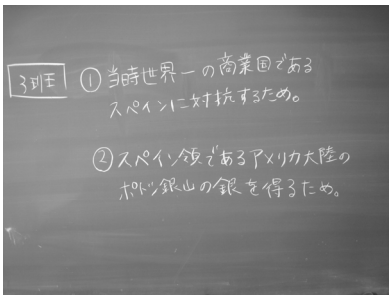
	・発表を聞き、その内容を記録する。 ・発表を評価し、その理由を書く。 ・発表された内容を踏まえて、ドレークの航海の目的について、各自の考えを文章で表現する。	・評価理由を明確に書かせる。	【思考・判断・表現】 ・イギリスとスペインとの対抗関係を踏まえて、ドレークの航海の目的について考察し、文章で表現している。 〔ワークシート№.２〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

展開の初めでは、グループ全員に役割分担をさせて発表させた。また、発表する前にワークシートに書かれた仮説を板書することと、発表の内容をワークシート№.２を見ながら確認するよう伝えた。発表を聞く側の生徒に対しては、発表された内容をメモに取らせ、さらに、発表に対する評価とその理由を書かせた。

発表は一つのグループで５～６分間とした。発表の中で、仮説の根拠となった資料の該当箇所を読み上げるグループが多かった。また、発表を聞いている生徒も、内容をメモに取りながら熱心に聞いている様子が見られた。

（仮説を板書する）

（ワークシートで確認しながら発表）



（生徒による板書）

以下は、ワークシートに書かれた各グループの仮説である。

Ａ組

＜１班＞

①アメリカ大陸の鉱山の金やアステカ帝国やインカ帝国などの財宝を奪うため。
②大航海時代に栄えていたスペインに対抗するため。

＜２班＞

①スペインから金銀を奪うため。
②スペインの土地を奪うため。
　これらによってスペインに対抗するため。

＜３班＞

①スペインにやられた復讐としてスペイン船やスペインの植民地を攻撃するため。
②アメリカに金・銀が大量にあったから。

Ｂ組

＜１班＞

①スペインの搬送隊から銀を奪ってイギリスの国家資金にするため。
②スペインの搬送隊を襲うことで、スペインの貿易を妨害して利益をもたらさないようにするため。

＜２班＞

①スペインの搬送隊から金銀を略奪するため。
②オランダ独立をめぐるスペインとイギリスの対立のため。

＜３班＞

①当時世界一の商業国であるスペインに対抗するため。
②スペイン領であるアメリカ大陸のポトシ銀山の銀を得るため。

全てのグループの仮説に、スペインとの対抗関係についての記述と、金や銀の獲得についての記述が見られる。スペインと対抗した理由については、Ａ組の１班やＢ組の３班のように、スペインが海外進出においてイギリスよりも優位に立っていたことを取り上げた班と、Ｂ組の２班のように、オランダ独立戦争（1568年～1609年）をめぐるイギリスとスペインの対立を取り上げた班があった。金や銀の獲得については、Ｂ組の３班がポトシ銀山と関連付けることができた。また、ワークシートには書かれていないが、Ａ組の３班も実際の発表の際には、ポトシ銀山との関連について触れていた。

発表に対する生徒の評価で、もっとも高い評価を受けたのはＡ組では、１班と２班の発表で、６名の生徒が「Ａ」の評価を付けた。「Ａ」を付けた理由として、生徒の書いたものの中からいくつか取り上げる。

＜１班の発表にＡを付けた理由＞
・資料集や教科書の内容を使っていて分かりやすかった。
・資料がよく調べてあったので、根拠や仮説に納得できた。
・ちゃんとまとまっていた。資料、教科書の中からその時代の背景を的確にとらえていた。
＜２班の発表にＡを付けた理由＞
・資料内容から推察を展開しているところがよかった。
・地図と資料を正確に読み取っていたから。
・資料から色々読み取っていたから。

１班は発表の際に、教科書や資料集を用いて、大航海時代以降の海外進出においてスペインの覇権が確立していたことや、アステカやインカでは金や銀の装飾具が豊富であったことなど、これまでの学習内容との関連付けを行っていた。２班は、１時間目に使用したワークシートにある地図から、ドレーク一行が中南米やフィリピンなど、当時スペインが植民地支配していた地域に多く立ち寄っていることを指摘し、それを根拠の一つとして仮説の発表を行った。

Ｂ組では、発表に対する評価が、どのグループに対しても「Ａ」が付けられた。そうした中で、２班の発表に対しては、分かりやすいという理由が多くの生徒からあげられた。２班は、Ａ組の２班と同様、発表の際に教科書や資料集を用いて、授業で扱った内容との関連付けを行った班である。授業で扱った内容との関連付けがなされたことによって、資料に書かれている内容が、生徒の既存の知識と結びつき、分かりやすいという評価につながったものと思われる。

すべてのグループの発表が終了したあと、一連の学習で得た情報を基に、ドレークの航海の目

的を二つ、ワークシート№.２の欄に各自で文章にまとめる作業を行った。生徒が書いた文章の内容をまとめると次のとおりである。

・アメリカ大陸のスペイン領の金や銀を奪うため　…13名
・当時繁栄していたスペインに対抗するため　…16名
・オランダ独立をめぐりスペインと対立していたため…２名
・アメリカ大陸にあるスペイン領を奪うため　…１名
・銀を奪いスペインに利益をもたらせないため　…１名
・金銀を奪うため　…１名

ほとんどの生徒が、スペイン領中南米から産出される金や銀を奪うことと、大航海時代以降繁栄していたスペインに対抗することを踏まえた文章を書いていた。また、すべての生徒が、二つの仮説のうち、いずれかにはスペインとの対抗関係やスペイン領からの銀などの獲得に触れた内容に触れていた。

生徒が書いたものの中からいくつか、具体例を紹介する。

＜生徒１＞

① アメリカ大陸に金銀（ポトシ銀山など）、そして財宝が大量にあったので、それを奪うため。
② 大航海時代に栄えていて、また敗れたこともあるスペインに対抗し
スペインの植民地や スペイン船を攻撃するため。

上の文章を書いた＜生徒１＞は、「ア　１時間目の授業」の仮説では、「①スペイン領の南北アメリカの財宝を略奪しようとした。②世界の海をよく視察して、財宝をとりやすい場所を見つけ、どのルートで逃亡すれば捕まらないかなどの見当をつけた。」と書いていた。この生徒はＡ組の１班に所属して活動した。１班は、資料の読み取りを通して、鉱山との関連や大航海時代にスペインが覇権を確立していたことなどを仮説として立てた。しかし、鉱山についてはポトシ銀山との関連に気付くことができていなかった。しかし、上に示した①の文章を見ると、この生徒は「ポトシ銀山など」という書き込みが見られることから、３班の発表から得た情報を生かして文章を書くことができたと考えられる。

＜生徒２＞

①アメリカ大陸にある、スペインの所有している金銀、財宝を奪うため
②当時栄えていたスペインの領地、植民地を奪うため
（後にイギリスが栄えた要因の一つか？）

＜生徒２＞もＡ組の１班に所属して活動した。１時間目にこの生徒が立てた仮説は、「①新大陸がどのようなものか見ること　②暖かい地方にしかないものを手に入れるため」というものであった。また、ワークシートを見ると、２時間目の資料の読み取りでは、「アメリカ大陸の鉱山の金を獲った」と書いている。しかし、１班の立てた仮説を見ると、アステカ帝国やインカ帝国について書かれているので、アメリカ大陸がスペインの植民地支配下におかれていたことが、話合いの過程で出たことが推測される。また、同じグループに所属する生徒が１時間目に立てた仮

説の一つに、「スペインに対抗すること」とあるので、やはりグループでの話合いの過程で、スペインとの対抗関係という情報を得られたと思われる。この生徒は、グループでの話合いを通して有用な情報を得て、それを生かして自身の考えをまとめることができたと言える。また、この生徒は普段の授業では控え目であるが、今回の授業では、グループでの話合いをリードしたり、３時間目には班の代表として発表したりするなど活躍した。

このように、多くの生徒が、グループでの話合いや、他のグループの発表から得られた情報を生かして各自の考えを書くことができていた。

3　まとめ

(1)成果

本事例では、その時代の資料としてドレークの航海に関する資料を取り上げ、資料の内容を読み取り、読み取ったことをもとに航海の目的について仮説を立てたり、発表したりした。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心・意欲を高めたり、それまでの学習で得た知識や技能を活用して、資料を多面的・多角的によみとく技能を高めたりできることを目指した。

２時間目のグループ活動の様子に見られるように、資料に関する教師の説明が終わると、早速作業に取り掛かる様子が見られたり、机間指導をする教師に積極的に質問をしてきたりするなど、生徒の関心や意欲を高めるきっかけとして、グループ活動や資料が有効であったことが分かる。グループとしての仮説を立てる過程においても、どのグループでも熱心に話し合いをしている様子が見られたことからも、生徒の関心や意欲は持続していたと言える。

また、グループとしての仮説を立てる過程で、多くのグループで教科書や資料集、ノートが参照されていた。その結果、これまでの授業で得た知識の中から、資料の内容に直接関連すると思われるものを見つけ出すことができていた。生徒は、それらの知識を活用し、資料に書かれた「銀」はポトシ銀山から産出したものではないかと推測したり、フランス兵がドレーク一行に加わっているという記述を、イタリア戦争以降のスペインとフランスとの対立関係と関連付けたりするなど、資料を多面的・多角的に考察することができていた。

３時間目の最後には 一連の学習で得た情報をもとに、ドレークの航海の目的を各自で文章書く作業を行った。生徒が書いた文章をみると、グループでの話合いや、他の班の発表から得られた情報が生かされていることが読み取れた。このことから、話合いや発表といった他者の意見を書く機会を設けたことが、それぞれの生徒が多角的な視点から自分の考えを書くことを可能にしたと言える。

(2)課題

今回の事例では、２時間目に行ったグループで話し合いながら仮説を立てる活動の過程で多くの生徒が教科書や資料集、ノートを参照していた。また、３時間目のグループの発表に対する評価においても、教科書や資料集を使って、これまで学習した内容との関連を踏まえた発表に対する評価が高かった。このことから、資料を活用した活動においても、生徒が資料の内容を納得して理解したり、そこから考察を進めたりする上では、それまでに学習した内容との関連が欠かせないことが分かった。一方、資料を活用した学習では、生徒の多様な考えを引き出すことも重要であると考える。本事例では、２時間目に行った、グループで仮説を立てる活動の際に、生徒が教科書や資料集、ノートを参考にした結果、１時間目に個人が立てた仮説に見られた「香辛料を獲得するため」というものや「植民地を獲得するため」といった多様な意見が消えてしまった。

これらの多様な意見を、３時間目の発表の段階まで生かすことで、生徒がより多面的・多角的に考察を進めることが可能になるのではないかと考えられる。

さらに、それぞれの生徒に、各自の活動で得た成果を踏まえながら、重要な内容を理解させる活動も必要であろう。例えば、本事例の場合、１時間目の最後にドレークの航海の目的について各自が書いた文章を、２時間目の最初に紹介することが考えられる。多面的・多角的な考察が生かされていたり、重要な内容を踏まえていたりして書かれている文章を取り上げ、教師がそれぞれの良い点についてコメントを加えながら紹介することで、その後に続く資料をよみとく活動の際に、生徒が多面的・多角的な考察を行うことができるのではないだろうか。

事例３　19世紀のロンドンに関する絵画資料を活用して、当時の社会の変化を考察する授業

１　ねらい

新学習指導要領において、「世界史Ａ」では科目の目標に「諸資料に基づき」の語句が加えられた。これを受けて、内容の取り扱いには、内容の全体にわたる配慮事項として、「年表，地図その他の資料を積極的に活用したり，文化遺産，博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして，具体的に学ばせるように工夫すること」が示された。また、「その他の資料」の例として、平成22年の『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』には、絵画があげられている。

これを踏まえて本事例では､19世紀後半のロンドンに関する２枚の絵画を資料として取り上げた。一つはギュスターヴ・ドレのロンドンの労働者住宅を描いたもの、もう一つは「パンチ」誌に1858年に掲載されたテムズ川の汚染の様子をあらわした風刺画であり、いずれも当時の労働者の劣悪な生活環境に関するものである。これらから読み取れる事象をもとに、産業革命の進展によって発生した社会の変化を考察し、考察したことを文章で表現するという学習活動を行った。一連の学習活動を通して、資料の内容をよみといたり、資料をよみといて得られた情報や発表されたことを基に考察し、考察したことを表現したりすることができることを目指した。また、絵画を使用することで、生徒が事象に対する関心や、学習活動に対する意欲を高めたりできるようにすることを目指した。

２　授業実践

(1)単元の指導目標

産業革命の進展により、19世紀のロンドンでは、労働者の生活環境が悪化したことを、絵画資料をよみとくことを通して考察させる。

(2)単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・産業革命の進展により、19世紀のロンドンで起きた労働や社会生活の在り方の変化に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・産業革命の進展により、19世紀のロンドンでは、労働や社会生活の在り方はどのように変化したのかを、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・産業革命の進展による、19世紀のロンドンにおける労働や社会生活の在り方の変化に関する資料をよみといて、有用な情報を得たり、文章にまとめたりしている。	・産業革命の進展による、19世紀のロンドンにおける労働や社会生活の在り方の変化に関する基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

(3)指導計画（３時間）

時間	学　習　活　動	評　価　計　画
1	・産業革命の結果、動力革命や交通革命が発生したことを理解する。 ・動力革命や交通革命により、都市への人口集中や工場労働者の増加が起きたことを理解する。	【知識・理解】 ・産業革命の結果、動力革命や交通革命が発生し、都市への人口集中や工場労働者の増加が起きたことを理解している。

2	・グループで話し合いながら資料をよみとき、よみといて得られた情報をワークシートに記入する。 ・よみときから得られた情報や話し合ったことを基に、19世紀のロンドンにおける労働者の生活条件が悪くなった理由について、文章でまとめる。	【資料活用の技能】 ・資料１からは、労働者の生活環境が劣悪であったことを、資料２からは河川（テムズ川）の汚染が人々の健康を害していたことを読み取っている。 【関心・意欲・態度】 ・資料のよみときを通して、労働者の生活状況に対する関心を高め､意欲的に追究しようとしている。
3	・資料をよみといた結果について、グループの代表が発表する。 ・学習した内容を踏まえて、19世紀のロンドンの労働や社会生活の変化について、各自の考えを文章で表現する。	【思考・判断・表現】 ・産業革命の進展による労働や社会生活の変化について、プラス面とマイナス面とを踏まえて表現できている。

(4)授業の概要

ア　１時間目の授業

１時間目は、産業革命の結果として起きた動力革命や交通革命によって、都市への人口集中や工場労働者の増加が起きたことを理解させることを目標とした。これは、２時間目以降の活動を進める際に必要となる事柄である。授業は２年１組（３４名）で行った。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・マンチェスターとリヴァプール間の鉄道の開通式（1830年）の絵画を見て、描かれているものをあげる。	・マンチェスターとリヴァプールの位置を地図で確認させる。	
展開 45分	・鉄道の開通によって、人々の生活はどう変化したか考え、発表する。 ・産業革命の結果、動力革命や交通革命が発生したことを理解する。 ・動力革命や交通革命により、都市への人口集中や工場労働者の増加が起きたことを理解する。	・通勤圏の拡大や大量輸送の実現など、具体的に考えさせる。	【知識・理解】 ・産業革命の結果、動力革命や交通革命が発生し、都市への人口集中や工場労働者の増加が起きたことを理解している。 〔ノート〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

導入では、教科書に掲載されている、マンチェスター、リヴァプール間の鉄道の開通式の様子を描いた絵画を見て、何が描かれているのか自由にあげさせた。客車や蒸気機関車、線路が描か

れていることや、着飾った人々が描かれていること、独特の帽子と赤い上着を着用した兵士がいることなど様々な発言が出た。これらの発言を踏まえて、絵画が鉄道開通式の様子を描いたものであることを説明し、さらにマンチェスターとリヴァプールの位置を教科書の地図で確認させ、マンチェスターが綿工業都市として発展したという前時の学習内容を確認した。

展開の最初では、鉄道の開通によって当時のイギリスの人々の生活はどのように変化したか、隣同士で相談しながら具体的な例を考えさせた。

イ　２時間目の授業

２時間目はグループ毎に活動を行った。一つのグループの人数は５～６名とした。19世紀後半のロンドンに関する２枚の絵画資料を載せたワークシート（**資料１**）を配付した。資料１については、描かれている情景を丁寧に読み取らせた。資料２については、何を風刺したものかを読み取らせた。これらの活動を踏まえて、19世紀のロンドンにおける労働者の生活はどのようなものであったかについて、各自で文章にまとめさせた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・資料に関する教師の説明を聞く。 ・グループで話し合いながら、資料をよみとき、よみといて得られた情報をワークシートに記入する。 ・よみときから得られた情報や話し合ったことを基に、19世紀のロンドンにおける労働者の生活条件が悪くなった理由について文章でまとめる。	・机間指導を行い、よみときに行き詰まっているグループにヒントを与える。	【資料活用の技能】 ・資料１からは、労働者の生活環境が劣悪であったことを、資料２からは河川（テムズ川）の汚染が人々の健康を害していたことを読み取っている。 〔ワークシート〕 【関心・意欲・態度】 ・資料をよみとくことを通して、労働者の生活状況に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。 〔ワークシート〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。	・次時の発表者を決めさせる。	

資料１

世界史Ａ　「産業革命による社会の変化」

２年　　組　氏名

Ｑ１　資料１を見て、何が描かれているのか書きなさい。

【資料１】

フランス人画家、ドレが描いた1870年代ロンドンの労働者住宅

Ｑ２　資料２を見て、何が描かれているのか、また何を風刺しているのか書きなさい。

【資料２】

「パンチ」1858年に掲載された挿絵

Q３　タイトル

Q４　これまでの学習を踏まえて、19世紀にイギリスの社会はどのような変化をしたのか考えて、文章でまとめよう。

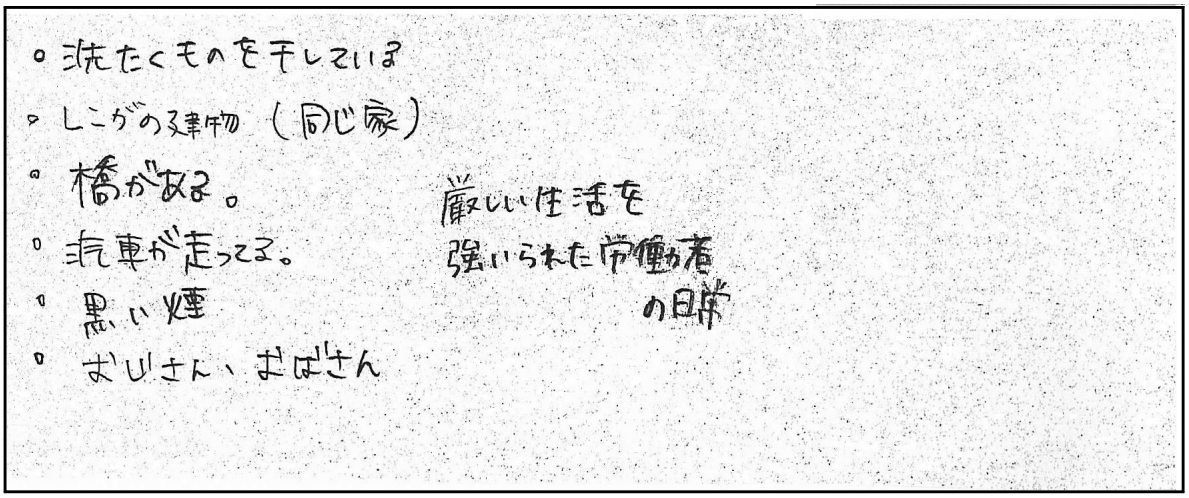
ワークシートを配布して、それぞれの資料について説明を加えた。よみとく作業が始まると、どのグループでも熱心に取り組んでいる様子が見られた。特に、資料２の風刺画については、何を風刺したものかについて、議論しているグループが多かった。あるグループでは、一人の生徒が考えを述べると、他の生徒が真剣に耳を傾けている様子が見られた。

（資料をよみとく活動の様子）

（友人の意見に耳を傾ける）

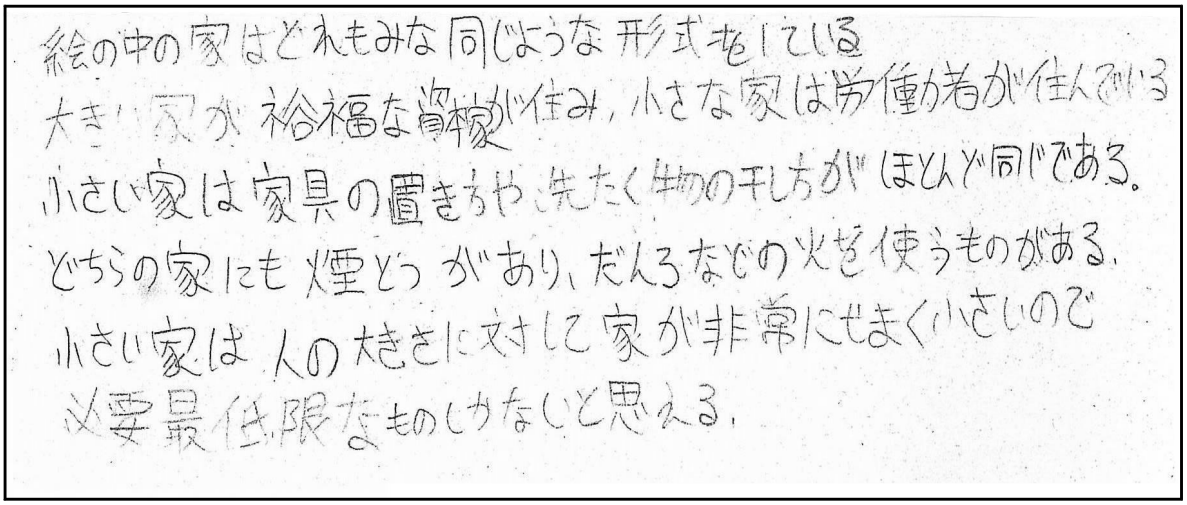
（風刺画のよみときで議論する）

以下は、資料１をよみといて得られた情報を生徒が書いたものである。



- 洗たくものを干している
- しこがの建物（同じ家）
- 橋がある。
- 汽車が走ってる。
- 黒い煙
- おじさん、おばさん

厳しい生活を
強いられた労働者
の日常



絵の中の家はどれもみな同じような形式をしている
大きい家が裕福な資本家が住み，小さな家は労働者が住んでいる
小さい家は家具の置きかや洗たく物の干し方がほとんど同じである。
どちらの家にも煙とっがあり、だんろなどの火を使うものがある。
小さい家は人の大きさに対して家が非常にせまく小さいので
必要最低限なものしかないと思える。

これらの例に見られるように、多くの生徒が資料１をよみとくことで、当時の労働者が劣悪な住環境にあったという情報を得ることができた。さらに、労働者がこのような生活環境に置かれた背景として、資本家による低賃金労働や長時間労働などがあったことに触れた生徒も多かった。

一方、資料２の風刺画のよみときの結果は、様々であった。机間指導の際に、活動の様子を見ると、活発な議論が行われているものの、風刺されている内容をよみとく手掛かりがつかめてい

ないようであった。そこで、資料２は19世紀のロンドンで発生していた社会問題を風刺したものであるというヒントを与えた。以下は、資料２をよみといて得られた情報を生徒が書いたものである。

右の人々は飢えていて、もう死にそうな状態。
工場から――
川が汚染して、

左）人間代表
右）おばけ？
環境破壊をうったえている。

・都市が見える。
「貧しくて食糧をめぐんでほしい？」農民から

ペットが死んでしまった。（汚染によって）「タイトル：謝罪」
女性は上流階級
右は死の世界

格差社会

①
・資本がある人とない人。
・水質汚だくの警告の掲板。

②
・貧富の差。
・水質汚だくで苦しむ人達など。

上に示した例のように、14名の生徒が河川の汚濁など環境汚染を風刺していると書いた。これとは別に、資本家などの上流階級と労働者との格差を風刺していると書いた生徒が９名であった。他の生徒は、描かれている事物を書き出すだけにとどまっており、風刺されている内容については書かれていなかった。しかし、グループの中での議論が熱心に行われていたことから、ワークシートに十分な内容を書いていない生徒も、他の生徒の意見を聞くことで、学習の内容に関する何らかの考えを得ることができたのではないかと考えられる。

２時間目の最後に、ワークシートの$\boxed{\text{Ｑ３}}$のタイトル欄に「19世紀の労働者の生活条件が悪くなった理由は何か」というテーマで、これまでの学習で得たことを踏まえ、各自で文章を書かせた。以下に、生徒が書いたワークシートの例をあげる。

人口の増加に環境整備が追いつかず、伝染病がはやり
生活条件が悪くなった。収入のひくさにより充分な量の食事
がとれない。資本家の利益が多すぎて、労働者の収入が減る。
汚水の処理ができていない。住宅の環境もとても悪い。
労働時間が長いのに安い賃金。

給料が安くて食糧、生活物資不足、住環境の整備が悪く不衛生、労働時間が長く疲労がたまる。これらの問題が労働者の生活を日々悪くしていった

・産業革命によって労働者と資本家の地位がはっきりしてきたため、労働者を低賃金でやとう資本家が多く、労働者の生活の質が落ちたから
・産業革命による環境破壊のため
・人口が急増し、住環境の整備が間に合わない

これらの例は、資料１をよみとくことで得られる情報（労働者の置かれた劣悪な住環境）と資料２をよみとくことで得られる情報（河川の汚濁などの環境汚染）の両方を踏まえて書かれたものである。また、低賃金や長時間労働など、これまでの産業革命の授業で学習した内容にも触れていることが分かる。しかし、資料１と資料２の両方を踏まえて書いた生徒は４名と少数であった。多くの生徒はどちらか一方の資料の内容のみに触れた文章を書いており、資料の内容を全く踏まえていない文書を書いた生徒も６名いた。３時間目の発表を通して、より多くの生徒が資料１と資料２の内容を踏まえて考察できるようになることが課題となった。

ウ　３時間目の授業

３時間目は、前時に行った資料をよみとった結果について、各グループが発表を行った。また、各自が、資料のよみときや話合い、さらには発表から得られた情報を踏まえて、19世紀のイギリスの労働や社会の変化について考察した結果を文章で表現させた。

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準〔評価方法〕
導入 ３分	・本時の活動内容の説明を聞く。		
展開 45分	・資料をよみといた結果について、発表する。 ・学習した内容を踏まえて、19世紀のロンドンの労働や社会の変化について、各自の考えを文章で表現する。	・プロジェクターを使用して資料をスクリーンに映写し、それを用いて説明させる。	【思考・判断・表現】 ・産業革命の進展による労働や社会生活の変化について、プラス面とマイナス面とを踏まえて表現できる。 〔ワークシート〕
まとめ ２分	・次時の学習内容の予告を聞く。		

２時間目の最後に、発表の内容をノートにまとめておくように指示した。併せて、発表する内容は資料１、資料２をよみといて得られた情報と、19世紀のロンドンにおける労働者の生活条件が悪くなった理由の２点であることを伝えておいた。

３時間目の授業が始まる前に、プロジェクターを準備し、資料１や資料２をスクリーンに映しておいた。発表者にはスクリーンに映された資料を用いて説明するよう指示した。

（資料を指さしながら説明する）

（各自の考えを文章で表現する）

以下は、発表された内容の中から、「19世紀のロンドンにおける労働者の生活条件が悪くなった理由」に関するものである。

＜１班の発表内容＞
・産業革命によって、イギリスの経済は発展しすぎた。国さえ発展すればよいという資本家の考えが、下の階級の労働者の生活を圧迫した。

＜２班の発表内容＞
・資本家が安い賃金で労働者を働かせた。また、環境の整備も人口の増加に追い付かず、伝染病が流行ったりした。

＜３班の発表内容＞
・資本家がより利益を得るため、労働者の給料を安くしたため、労働者は食べるだけで精一杯となり家賃の安い家にしか住めなくなった。
・人口が増加し住居や道路などの住環境の整備が間に合わなかった。

＜４班の発表内容＞
・労働者の人権や環境よりも、自国の工業の発展が優先されたから。
・人口が急増し、住宅の状況が悪くなったから。

＜５班の発表内容＞
・もらえるお金が少なく、どれだけ働いても最低限の収入しか得られない。
・人口の増加により環境が悪くなった。汚水が道路にあふれたり、河川が汚濁したりして、伝染病が増えた。

＜６班の発表内容＞
・工業化が進み、排気ガスや汚水の垂れ流しなどが原因で、労働者の住む環境が悪くなってしまった。また、労働者も低い賃金で重労働をさせられた。

＜７班の発表内容＞
・資本家の利益が大きすぎて、労働者の収入が減ってしまった。
・汚水の処理ができていないため、伝染病がはやり生活条件が悪くなった。

＜８班の発表内容＞
・労働者は安い賃金で働かされていたので、食糧や生活物資が不足していた。また、労働時間が長く、疲労もたまっていた。
・居住環境も悪く、不衛生であった。

発表の内容を見ると、どのグループも資料をよみといて得られた情報と、その背景とに触れていることが分かる。また、２班、５班、６班、７班は、資料２の内容も踏まえて発表できていることも読み取れる。ただ、河川の汚濁と伝染病の増加との具体的な因果関係について理解できているかは、発表からは判断できなかった。そこで、当時の労働者の住宅街には上水道がなく、多くの労働者は汚染されたテムズ川の水を汲んで飲料水にしていたことを説明した。

発表がすべて終わってから、ワークシートの「Ｑ４　これまでの学習を踏まえて、19世紀にイギリスの社会はどのような変化をしたのか考えて、文章でまとめよう。」を書かせた。

生徒の書いた文章の一部を紹介する。

＜生徒１＞

工業が発展し、一部の資本家など中上流階級の人々は生活が豊かになり、国全体も豊かになったように見えたが、労働者などたいはんの国民は産業革命の犠牲となり、生活の質を落としてしまうことになった。

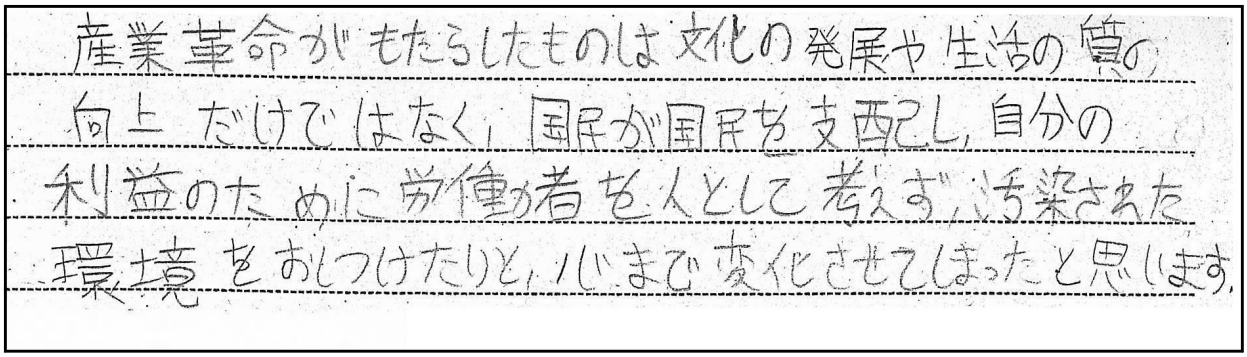
＜生徒１＞は、文章の２行目に、「人々は生活が豊かになり、国全体も豊かになったように見えたが」と書いていることから、動力革命や交通革命による生活の変化という１時間目の学習内容も踏まえていると考えられる。しかし、後半の「たいはんの国民は産業革命の犠牲となり」というところを、産業革命による最も重大な社会の変化であるととらえている。

＜生徒２＞

産業革命がおこって、新しいものを作ったり仕事の効率があがったりして、世の中に便利なものが多くなった。その中で資本家など、裕富な人も出てくる一方で労働者などは貧しい生活を送るなどの社会的格差も生まれてきた。

＜生徒２＞も、「世の中に便利なものが多くなった」という文章があることから、１時間目の学習内容を踏まえていると言える。また、後半では資本家と労働者との格差の発生について述べている。

＜生徒３＞


産業革命がもたらしたものは文化の発展や生活の質の向上だけではなく，国民が国民を支配し，自分の利益のために労働者を人として考えず，汚染された環境をおしつけたりと，心まで変化させてしまったと思います。

＜生徒３＞は、産業革命により、文化の発展や生活の質の向上があった反面「国民が国民を支配」する社会が成立したととらえている。

これらの生徒の文章に見られるように、多くの生徒が産業革命による社会の変化について、プラスの面とマイナスの面の両方を踏まえた文書を書くことができた。

(5)生徒による授業評価

３時間目の終了後、アンケート用紙を配付し、後日回収した。集計の結果は以下のとおりである。なお、評価はＡが「あてはまる」、Ｂが「どちらかというとあてはまる」、Ｃが「どちらかというとあてはまらない」、Ｄが「あてはまらない」である。

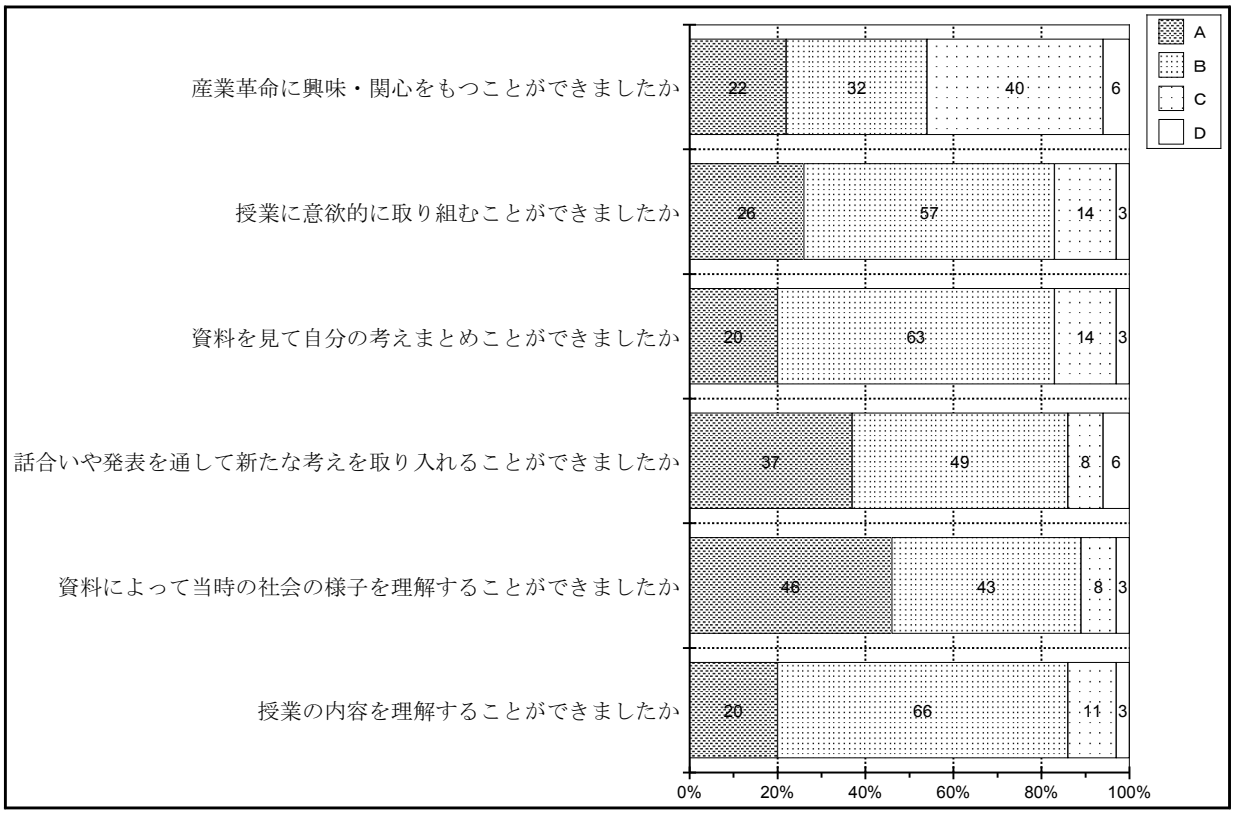
アンケートの結果（**資料２**）を見ると、絵画を使うことが、産業革命の時代の様子を理解させる上で効果があったことが分かる。また、話合いや発表が、生徒の考えを多様なものにするのに有効であったことも分かる。一方、「産業革命に興味・関心をもつことができましたか」という質問に対する評価が低い。

また、自由記述の欄には次のような感想が書かれていた。

- グループで話し合いがよくでき、新たな意見が聞けてよかった。
- 班になって話し合ったりすることで、自分以外の人たちの考えについても知ることができ、自分とは違う発想を知ることができておもしろかった。
- 中学校の時より産業革命について詳しく知ることができて、前より興味がもてた。写真や図ら分かることがたくさんあっておもしろかった。
- イギリス社会が工業化によってどのように変化したかがよくわかった。このことは、現代の様々な問題とも関係していると思った。
- 産業革命でメリット、デメリットを知ることができた。
- 資料から、細かいところまでみるととても深い様子を読みとれることがよくわかった。

感想を見ると，班別学習や発表など、意見を聞く機会が生徒の関心や意欲を高めたり、事象に対する多面的・多角的な見方をしたりするのに効果があったことが読み取れる。また、資料の効果についても、「写真や図から分かることがたくさんあっておもしろかった」、「とても深い様子を読みとれることがよくわかった」など、肯定的な意見が多かった。

資料２（数字は％）



３　まとめ

(1)成果

本事例では、19世紀後半のロンドンに関する２枚の絵画を取り上げ、それぞれをよみといて、よみといて得られた情報を基に、産業革命の進展によって発生した社会の変化を考察し、考察したことを発表したり文章で表現したりする学習活動を行った。これらの学習活動を通して、生徒が事象に対する関心や学習に対する意欲を高めたり、資料の内容や発表された内容を踏まえて考察したりすることができることを目指した。

すでにアンケートの分析のところで述べたように、絵画資料を用いたことで生徒の関心や意欲を高めることができた。また、グループでの学習や発表によって、他人の意見を聞くことが、生徒が多面的な考察を行う上で有効であることも分かった。産業革命による社会の変化について、鉄道の開通に代表されるプラスの面と、労働者の生活の悪化というマイナスの面の両方を踏まえた文章を、多くの生徒が書くことができたのはその効果が現れた結果であると言える。

今回は２枚の絵画を使用した。ギュスターヴ・ドレの「ロンドンの貧民街」は、労働者の生活の様子が詳細に描かれており、生徒が考察を進める上で効果があった。また、テムズ川の汚濁に関する風刺画については、その内容をめぐって多くの班で活発な議論が展開されていた。風刺画は具体的な事物そのものを描いたものではないことが、生徒の想像力を刺激して活発な学習活動を促したと考えられる。

(2)課題

アンケートの結果をみると、「産業革命に興味・関心をもつことができましたか」に対する評価が低い。この項目に「Ｃ」または「Ｄ」を付けた生徒の記述内容を見ると、低い評価をした理由として以下のようなものがあげられている。

・資料の図を見て他の人の意見を聞くことができて、納得した部分もあったけれど、そこからのまとめ方がよくわからなかった。
・板書が少なかったから。

これらの理由に共通することは、いわゆる講義形式の授業への慣れから来る不安であると言える。資料から読み取った情報や、話合いや発表から得られた情報を、各自でワークシートに記録したり、学習内容を各自で文章にまとめたりするといった活動に対して、自分の記録や文章が学習内容の要点を抑えているのかどうかという不安が発生しているのではないだろうか。

事例２の「(2)課題」でも触れたが、さらに４時間目を設定して、生徒が書いた文章を紹介し、それに対して教師が学習内容の要点を踏まえたコメントをするなどの工夫が必要であろう。

３　世界史における授業改善の方策

本研究の実践では、「世界史Ａ」及び「世界史Ｂ」において、資料を基に、その内容をまとめたり、事象の背景や原因を考察したり、それらの結果や自分の考えを表現したりする言語活動を取り入れる指導の工夫に取り組んだ。各事例の成果や課題から、次のような指導が授業改善の方策として有効であったことが分かる。生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を参考にしたりして御活用いただければ幸いである。

（１）資料を活用する活動を取り入れる

各事例のところで紹介したように、資料を活用する学習を行うことで、生徒の学習内容に対する理解が深まったり、関心や意欲が高まったりするという成果が出た。事例１では、年表を作成させたり、地図と関連付けながら事象の背景を考察したりする活動を行った。こうした活動を行うことで、生徒が同時代の世界の諸地域を比較する視点をもつことができた。事例２と事例３では、その時代の資料を提示して、よみとく作業を行わせた。生徒たちは、グループで話し合ったり、これまでの学習で得た知識との関連付けを図ったりしながら、資料の内容を熱心に読み取っていた。こうした効果を高めるためには、生徒に何を読み取らせたいのかという目的を明確にすることや、生徒がこれまでの学習で得ている知識との関連を図ることが重要である。

（２）グループ活動を取り入れる

各事例ではグループ活動を取り入れた。グループの中で話し合ったり、グループの意見を発表したりすることで、それぞれの生徒が様々な考え方を知ることができるという効果があった。このことは、事象に対する多面的・多角的な見方を促すためにも重要である。また、資料をよみといたり、関連付けを図ったりする活動は、グループ内での協力があってより深まった。例えば、事例３のように風刺画をよみとき、風刺されている社会問題を考察する活動では、グループ内で様々な意見交換が行われていた。ある班では、一人の生徒の仮説を全員が集中して聞いている場面も見られた。このように、グループ活動は生徒の多面的・多角的な見方を実現したり、協力して課題を解決したりする上で効果がある。

グループ活動を取入れる際には、個々の生徒の考えが尊重されるよう工夫することが必要である。グループ内で個々の生徒の考えを発表する際にも、それについて検討する場面を取り入れたり、グループ内での意見交換や他のグループの発表を聞いて、自分の意見を変える際にも、変える理由を書かせるなど、生徒が他の意見に流されるのではなく、自分の意見と他の意見とを比較した上で、納得して意見を変えることができるような工夫が必要である。

（３）仮説を立てる活動を取り入れる

事例１ではペストがヨーロッパに伝わった原因や背景について、事例２ではドレークの航海の目的について仮説を立てさせた。また、事例３では19世紀のロンドンの労働者の生活環境が悪化した原因を考えさせた。このように、グループとしての意見をまとめる活動を取り入れたことにより、生徒の関心や意欲は高まった。事例２の場合のように、仮説を立てるために、生徒たちが教科書や資料集、ノートを参考にする場面が見られるなど、生徒の主体的な授業への参加が実現した。

今回の実践のように、資料を活用した活動を行う際には、単にその内容を読み取ったり、まとめたりするのではなく、仮説を立てることを目的とした活動を取入れることが必要である。その

ことで、資料をよみとく視点が得られたり、友人との意見交換が活発になったりする効果が得られたりすることができる。

（４）学習内容を文章にまとめる活動を取入れる

今回紹介した事例では、学習活動の最後に、それまでの学習で得た情報を踏まえて、各自の考えを文章に表現する活動を行った。自分の言葉で表現することによって、学習した内容が定着すると考えたためである。各事例のところで紹介したように、多くの生徒が、一連の学習活動で得られた情報を踏まえて、事象について多面的・多角的な視点から文章を書くことができていた。

それぞれの生徒の事象に対する視野をさらに広げるためには、生徒たちが書いた文章を紹介する時間を設定する必要がある。他のグループの発表を聞いて、事象に対して一層多面的な見方で文章を書くことができるようになった生徒がどの事例にも見られた。このことから、学習内容のまとめとして生徒が書いた文章を紹介し、教師がその良い点とその理由や学習のポイントとの関連を踏まえたコメントを添えることで、それぞれの生徒が自身の考えと関連付けながら学習のポイントを理解したり、事象に対して新たな興味や関心をもって主体的な学習を始めたりすることができるのではないだろうか。

◇平成23年度高等学校における教科指導の充実　研究協力委員・研究委員（地理歴史科）

研究協力委員

栃木県立小山高等学校	教諭	早川　正人
栃木県立栃木翔南高等学校	教諭	手塚　博子
栃木県立馬頭高等学校	教諭	岩田　大輔

研究委員

栃木県総合教育センター　研修部　指導主事　　豊住　隆行

高等学校における教科指導の充実
地　理　歴　史　科
資料を活用した学習を取り入れた世界史の指導

発　行　　平成24年3月
栃木県総合教育センター　研究調査部
〒320-0002　栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204　　FAX 028-665-7303
URL http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/